明治二十九年十二月五日發行

女鑑

號

東京國光社

女鑑第百二十二號

目録

破鏡



につかはしき事

清女が昔の草紙の筆めきたる言草ながら、よろづのもの事、すべて、世の中は、につかはしき事こそありたけれ。否、たゞにありたきのみにあらず、何にても、すべて、につかはしくこそあるべきなれ。につかはしくあることは、いと大切の事なり。につかはしくだにあらば、もの事は、皆、うるはしかるべし。につかはしき方に思ひも望みも志しも行かば、人の心は、やがて、まことに美はしく、につかはしきさまにうち行ひ、立ち振舞ひゆかば、人の形容、人の所業、いづれかあはれに美はしからざらむ。されば、わがにつかはしくあることは、やがて、人の上の有様世のもの事の美はしかるべき道なりかし。

かくて父母にむかひては、子といふ分際ににつかはしからむやうにとのみ、心に思ひ身に行ひゆきたらむには、自から孝といふ道にもはづれず、よく美はしき子

たるを得べく、また、兄弟と並びては、兄といひ弟といふ分際に、いづれもにつかはしからむやうにとのみ、心をかけ、行ひをしむけゆかむには、自ら友愛の道にはづれず、よく睦まじき兄弟たるを得べく、さて、また、朋友と伴れ立ちても、伴れ立ちゆくきはににつかはしからむ方にとのみ、思ひも云ひも行ひも爲しゆかむには、自ら信義の道にもはづれず、よくまことの朋友たるを得べきにこそ。もとより子にむかひては、父母たる分ににつかはしからむやうにとのみ。心添へ行ひゆかむには、自らやさしく正しき親たる道にはづれず、よく美はしき父母たるを得べければ、よくまめやかなる臣たらむも、また、れなじ事なりかし。

斯く、わが分ににつかはしく心に思ひ、につかはしく身に行ひ、につかはしく志し、につかはしく云ひ、につかはしく立ち、につかはしく行き、につかはしく着て、につかはしく食ひ、につかはしく住み、につかはしく務めて、につかはしく樂みゆかば、誠に世ににつかはしき人にして、やがて、まことの人たるなれば、また、やがて、誠に國家のうるはしき臣民たるなり。

一身の上の道のみにあらず、すべて、につかはしからざるは、畢竟其のものゝ分を守らず、其の分を盡さゞるなり。

學校は如何なるものぞ。學校の本分とするものは、何事ぞや。學校は、やがて、誠の人とならむずる智識道徳の訓練場なり。教師は、此處に立ちて、よく生徒を導きて、人のふむべき正しき道をさとし、人たるべき美はしき智識を開き、人の知るべきめでたき學術を教へ、人の具ふべきあはれなる才藝を教へ、やがて誠の人に教へ育てんとすれば、生徒は、此處に通ひて、よく師の教導に從ひて、人たらむ正しき道、うるはしき智識、めでたき學術、あはれなる才藝を習ひればにて、誠の人と成らむと志すべき所なり。

學校は、實に斯の如きものなり。斯の如き本分のものなり。學校は、決してあやしき狂言猿樂やうなき遊戯の稽古場にも舞臺にもあらず、學校は、まことに尊き道徳、うるはしき智識學藝の訓練場なり。

學校の目的、學校の本分は、實に智識の開發身體の發育道徳の薫陶にあるなり、

學校の事業は、常に此の本分目的ににつかはしき事を爲さゞるべからず。よしや一時の運動會ばかりのものとても此の本分、此の目的を有てる此の學校ににつかはしく、いかにも學校の運動會なりともいふべきさまにこそ行ふべきものなれ。平生勉學の苦を慰むる一時の運動會なればとて、學校の運動會、さる本分の學校の運動會に、あらぬさまにまねび興じ、むねわるき茶番狂言のさまをまねびよろこび、猿樂やうのふるまひをして興ずるなどは、いかでにつかはしき學校の運動會ならむや。いかでか學校ににつかはしき所業といふべき。若しかゝる運動會を行ふ學校あらむには、吾人は、實に其の學校の平生の敎導をも疑はざるを得ざるなり。

ましてや、女子の學校、實に溫厚靜淑の美德を薫陶すべき女子敎育の學校に於て、かゝるあさましき運動會を行ふあらば、吾人は實に驚き泣かざるを得ざるべし。運動會とても、自ら學校の目的にはつれず、學校の本分ににつかはしきものゝあるべければなり。吾人はいかに理由を附するとも茶番狂言猿樂などやうのものを

以て、温厚清淑の美徳を薫陶すべき學校ににつかはしき運動會なりと認むること能はざるなり。よしや一時の遊樂なりとも學校の遊樂ならむには、學校の本分目的に反かざる遊樂こそあるべきなれ。然らざれば、常に間隙なく其の本分を守り、其の本分を盡さむと、一意に進みゆく學校にあらざるなれば、いとおぼつかなく賴むべからざる學校といはざるを得ず。

吾人は、我が國の女學校に、さるおぼつかなきくちをしき學校は一も無き事を信ずる者なり。されど此の頃、さる學校の風聞を耳にすれば、すべてにつかはしからむ事をすゝめて女子教育者の一層の注意を望むなり。

よくゆきてよくかへりきてたらちねの
かはらぬまへなはやなかみませ
(賀茂眞淵)



地方の婦女子

坂本三七郎

都下紅塵の中に住すに、何ぞ其身の閑なるを得んや。また人事紛擾の裡に奔走する。何ぞ其情の靜なるを望むべけん。況んや、奢侈の風心を誘ひ、輕佻の俗、身を侵す。此に於てか、滔々たる少年少女をして流れて歸るを知らざらしめ、所謂一日之を煖むる敎育、十日之を冷す境にあらしむ。就中女子敎育の道未だ全たからざる今日、善美なる大和撫子をして、狂風に折れ、愁雨に泣かしむ。豈に泣かしむるのみならんや、終に日本婦女の天性を賊害して、徒らに輕操浮薄の女子を出し、有識者をして敎育なきの勝れるに如かずと痛言せしめ。父兄をして學に入るゝことの無益なるを歎せしむるに至れり。吾人が常に論じて已まざるものは實に之が爲なりき。

吾人近頃地方に遊び、婦女子の狀況を觀て、大に感ずる所のものあり。其温和にして貞淑なる、其撲實にして勤勉なる、家庭の間に處して婦女子の道に盡すに於て、實に

賞すべきものあり。且其爲す所一郷風を成し、一村化をなし、一家相和し、只々自然的にして、少しの矯飾して爲にするが如き狀を見ず。自から以て分とし職となす。嗚呼此の如き婦女子にして始めて敎育の功を奏すべく、而して之を敎育する道は、其素を失はずして指導するにあるなり。

吾人は久しく都下に在りて、輕佻の婦女子を觀、脫兎の如き輕操の處女を觀、常に、之を矯揉して女性の本に歸せしめんとせり。今にして悟る、吾人の察する所は狹隘にして論ずる所は酷なりしを。然れども吾人をして失言の罪を謝せしむるものは、豈に國家の至慶にあらずや。吾人は乞ふ都下の婦女子を捨てゝ、無垢玉の如き多數の田舍婦女子の侶伴たらんことを。

彼等の衣服は綿衣なり。吾人は其淸きを愛す、況んや自から織り、自から裁するに於てをや。之を垢れたる絹衣を着て洗はす、破綻之か補綴をなさす、而して口に議論を闘はし、徒に筆に女權の空論を說く都下の女書生に比せむ、果して如何ぞや。家庭敎育の素は母にあり、其敎は處女なる時にあり、處女豈に脫兎の謂ならんや。都下の婦女子は、智湧き才達し、而して多藝なり。田舍の婦女子は、才藏し智隱れ、藝は女功の事に過ぎず。何ぞ茶道挿花を知らん。何ぞ糸竹の妙を解せん。是れ或は欠點

ならん。然れども尙ぶ所もまた、此欠點の中に存せり。智と愚と、才と不才と、人品の分る丶所若し智にして、猾ならざれば果して良智なり。才にして妬あらずんば果して良才なり。田舍の婦女子は妬と猾の弊に入らず。學校の中、家庭の間、只直情にして樸素たるのみ。或は女性の弱點として妬と猾とあらん。蓋し都下婦女子の如き甚しきを見ざるなり。繻珍の帶は價貴し此に於てか綿繻珍生じ、「アルミ」の釵は純金の指環を欺き、古渡の珊瑚、今はゴム玉の美にして人を誑くに如かず。田舍の女子は尙是れ暈翳ある玉の如きか。瑕瑾ある珊瑚の如きか。欠失ありと雖も其質は純精なり。朴實なり。敎育の一點にして宜を得ば、終に精金美玉市に價あらんか。

吾人は嘗て論せり。純良貞正なる婦女の特性は、上流にあらず、下流にあらず、中等婦女子が掌裡にありと。今地方に遊ぶに及びで、更に日本婦女の粹は、山清く水澄める田舍の婦女のあるを悟れり。彼等の多くは才智に短なるも婦德を實踐し、處女の性行勉めずして躬行せり。家庭和樂の化之に於てか得べし。若し夫れ夫に先ちて語り、母を退けて誇り、以て女權を得たりとする婦女に比して、果して如何ぞや。夫と手を携へて遊ぶを知る。舅姑に從て祖先の墳墓に詣し、一日の閑、父母に歸寧して歡を奉ずる情味は、讀者諸孃以て如何となすや、吾人は之を聞かんと欲すること切なり。

女子教育一班（三十）

三輪田眞佐子

第五、妻たる智識。　夫婦は一男一女が偕老の契をなすものなれど、婦人に貞操の性徳あるべきは言ふを待たで肝要ならんも、なほ妻たる職分を盡すに足る智識なきものは、夫及び一族の不幸なるのみならず、自身も事意に從はず、物思に戻り、つねに怏々として歳月を送り、遂には破鏡の止むを得ざることさへ起らんかし。

良人のため食膳を調へ、衣帶を捧げ、出づれば門に送り、歸れば戸に迎へ、朝は首を梳り、夕は足を撫でんも、これのみにて未だ妻の本分を果せりとな思ひそ。何となれば、かゝるわざは、婢妾だに行ひ得ればなり。

苟も夫婦の實を全うせんとならば、先づ妻とは如何なるものなるかを知らざるべからず。そも／＼夫婦は、終生苦樂を共にすべきものなれば、情に於ては父子よりも兄弟よりも、さては朋友よりも親しかるべきなり。されば、夫婦は身こそ異なれど、心は一つなるものと思はざるべからず。されど、智識なき妻は言ふことと利害を慮らず、行ふことと得失を思はざるを以て、往々夫の思想に戻るのみかは、反りて夫のためにもがなと、牝鶏晨に鳴くわざをして、禍災を招くもの多ければ、誰か胸襟を開き肝膽を注ぎて、かゝる妻と共に苦樂を語らん。既に妻ながら難波のよしもあしも互に相謀るこ

と能はずとせんか、妻の實いづくにかある。されど、今日女子敎育に於ては、妻たる任務を盡すに足るやう目的を定むべし。おのれは、世の人たちが、妻の愚なるに困るかなどの歎聲を聞くごとに、女子敎育の必要を感ぜざるはなし。

まことや、妻は、夫の懷く立世の方計を妨げざるのみならず、進みては良人を輔佐するものならざるべからず。元來男子の天性は粗剛にして、女子の本性は密柔なれど、各一短一長あり。こゝを以て、夫婦相待ち相助くるときは、諸事圓滿に行るべし。蓋、天の兩性を異にするものは、偶然ならんや。故に、男子は女子の足らざる所を補ふべく、女子は男子の欠くる所を充すべし。女子の智育を論ずるものは、須らく補佐の智識を養ひて、そが良人の立身を催し、一門の光榮をも輝さしめんことをつとめてよ。

既に人の妻たるものは、良人萬一の秋にあたりて、狼狽せざるやう處置するに足る智識なかるべからず。滿山の紅花も一夜の嵐に散るこそ世の習なれど、當時良人全盛なれどとて、一朝國のため、あるは病のため、不歸の客とならんも知るべからず。そのとき、良人の名を辱かしめざるのみならず、孤兒を養ひて、一門の譽を落さゞる力量なきものは、妻の資格なきものぞかし。若しかゝる力量なうして嫁ぐものあらむ、あな劍の山に登ると何ぞ異ならん。おのれは、世の父母たるものが、愛孃の妙齡、ある

は美貌を利用し、若しくは門地の高きと家財の多きを恃み、またき妻たる智識を具へしめで嫁せしむる心を推はかるに苦むなり。

婦人の交際は、徒らに奨勵すべきものにあらざれども、世事頻繁に進み、一門の交際増すに從ひて、良人不在なるため止む事能はずして、客に應接し、若しくは良人の他出し能はざるため人を訪ふなどは、避けんと欲つするも遁れ難けれど、妻は良人のため、人に談して誤らず、將た人に接して好を破らざるやう智識を用ゐざるべからず。古人曰ふ、家貧くして良妻を思ふと。これと等しく、名望進むにつれて良妻を思ふは、今の世の實例にこそ。

その他妻たるものは、舅姑を安んじ、昆弟姉妹を調和するなど、おのづから身分に附隨する關係を全うするに足る智識を要するは明かなり。

くもらぬな
かみよのまゝの
こゝろそさ
そらにいさめて
つきやすむらむ

（寅　隆）



史談

破鏡

鹽井ふく子

あはれ破鏡、その名は破れたれど、その操、その行は、とこしへに世の鏡となさまほしき貞操の婦人、その破鏡と云ふは、時を失ひ、世を去りたりし後の名にして、初めの名は何と云ひけるにや、知らず。此の破鏡は、もと膳所の士の菅沼外記と云ふものの妻にて、和泉、岸和田のある士の女なりけり。

夫外記は、芭蕉の門人にして、馬橋堂曲翠と云ひて、俳諧をもて世に知られし人にて、此の妻もまた敷島の道を好み、つくし琴に妙を得て、才藝たゞならず。

ひとゝせ、夫と共に故郷へおもむき、播磨路を行きめぐりて、道の記をかけるが、その文章もいとおもしろしと見知る人、語りたるよしなれど、如何なる記にや、さぐり得ぬぞ口惜しき。

外記の傍輩に檀太夫と云へるものありけり。その人、いとへつらひ人にて、巧言令色

を以て、主君にはおもねり、下にはその寵をほこり、あなどりおとしめ、善人をそしり、惡人をひきたつる事のみの多きに、人々皆憎めども主君の寵臣なれど、如何ともすることあたはず、齒をかみて忍ぶもののみ多し。

外記かねて、かゝる人の權をほしいまゝにするをうれひにうれふるといへども、もとよりさとらざる君、あしき臣、いさむるも、いましむるも、きかれもせねど、聞きもせざらん。反りて己れをおとしいれられんのみと思ひ、たゞ己れを直くして、まがりしものおのづからためんものと、麻の心の一ふしをつくせど、彼方は、もと、敎ふるも、學ぶもさとらざる惡人、ますく〳〵寵を恃みて、己があしき事のさまたげと思ふは、上なる人にても事をかまへて、おとしいれ、佞人奸人、己が黨と見る人をひきたてなどして、惡事はいよ〳〵まさり行くに、かくては主家のため、主君のため、よき人のため、口惜しき事と、外記は、今は思ひゆるされず、ある日事をまうけて、己が家に、その人を招き入れ、だん〳〵の惡事をせめ、さるものをおきては世のみだれを生ずるのもと、共に天を戴かずと、一刀のもとに切りすて、己れもやがて、その太刀にて、心しづかに腹かききりて生害しけるが、なほ、主君に非名を負はすを忌みて、私の爭論もて、なせし如きさまにしけり。

嗚呼眞の忠臣、家を忘れ、妻を忘れ、子を忘れ、身を忘れ、しかも名を忘れて、主君のためたゞ誠の一すぢをつくしはてしを、あはれむべし、主君はさりともさとらず、色をすゝめ、氣をうかがふ寵臣を失ひたる怒りは一方ならず、遂にその子内記といへるものゝ江戸にありけるも自盡を命ぜられて、家は亡びはてぬ。嗚呼、くもりたる天の下は是非もなき事にこそ。されど、上にはなほ、日の光りくまなく、外記が忠誠何處よりか世にもれて、彼處には今も語り傳へて悲しむとぞ。

世のため、君のため、人のためとはいへ、夫は天命を終へずしてはて、子もまた罪なくして失せぬ。ひとりとりのこされし妻の心はそも如何なりけむ。千代、八千代、あしたづの音に呼びなくも、ことほぐも、親あり、子あり、夫あり、妻あり、友ありての上のみ、夫にはつれられず、子はとられて、何かたのしからむ。げに妻女は聲もかれはつるまでなくともかへらず、呼べど答へずたゞ、夫は忠誠の實をかくして死せしを、思へどさとられぬ世も、中々に志のあつきならんと、思ひきりたるなげきと共に、髪をもたとして尼となり、堺津にかくれ、すむ甲斐もなき世に、なほ歌をよみ、糸をならし、春のはな、秋の月、強ひて心をすましたるは、風雅とや云はん、清操とや云はむ。その箏の調いかぞかり高かりけん、今もそのふしの其處に傳はり殘りて、破鏡

流と云へりとかや。
あはれ、風雅と云ひ、風流と云ふも、誠は一すぢの道を知りてたのしむのみ、曲翠破鏡のむかしを汲みても、世の人、風雅の道の、外にありとればし給ひそ。破鏡再び照らさずと云ふ意にて、薙髪の名につけゝるも、貞操の意、風雅の志、れのづからに汲まれて、傳へぬもをしけれど、此處にかくはつぎあはせぬ。

勝野千賀　　安藤紫光

幕吏の専横を憤りて、國を思ふ心情やみがたく、身を挺して王事に勞し、家をも身をも顧みず、孜々として、勤王討幕の議を講じ、遂に、己率先して、京師に上り、鵜飼頼等の人々と計りて、密勅を水戸に乞ひ奉りたるなど、隱々裏の功績著しく、此の明治の聖代にあひ、苔の下にも春いたりて、靖國神社に合祀せられ、且從四位を贈られたる儁傑勝野豐作。その內助の妻、また、凡庸の者にはあらず。幾何かその夫の感化をうけたることはあらむも、猶家を治め、夫を助けたる温順、晩年艱難流離の間に處したる氣節、ともに得やすからざる所にして、その天性にいでたることは蓋疑なきなり。

この豐作の內助の妻は、幕府代官の附役松井孝作の女、名を千賀といへり。千賀か夫の方に嫁きたるは、そが僅十六歲の頃なりき。その、生家をいでしときの若き心にも猶再この閾の中には歸り入らざるべし。女子は三界に家なしといへり。嫁ぎたる家はおのが家。家を治めて和らかに、夫を助けて、事をなさしむるは、女子の務なるぞと深くれもひしみたりけむ。

豐作王事にいそがはしく、かしこゝに奔走して、席の暖なる暇もなく、交際などもいと廣きを、千賀內にありてよく之を助け、專心を外に注がしめぬ。又豐作の家には老いたる祖母と、すこやかなる父母とあり。又弟妹などありて家族いと多かりしかど殊によくなごみて、聊の風波をもあげざりしは、まこと、此の千賀の溫雅柔順なる周旋によりたるなりけり。あはれ、世の人、家族多けれど、家治まらずなどないひそ。いかに家族は多くとも、その家の婦の心掛によりて、治りもすべく、亂れもすべきものぞ。和やかなる春風は、物さびしき冬の景色をもふきときて、霞のどけき春の綠をもねしむるにはあらずや。この春風の心をもちてあやなしゆかむ、いかでのどけき、春の光のかゞやかざらむ。げに一家のよく治るは、婦たるものゝ心によれり。勝野一家のよく治りたるは、只この千賀の心の春風。

かく温順なる千賀なれど、夫婦の間もいと睦じく、子四人をうみぬ。長女を初山といへり、こは後に水戸の後宮に仕へぬ。次は森之助、次は駒次郎、こは早くうせぬ。その次の女を勇といへり。(後に濱とあらためき)この四人の子を鞠育し、よく教導して、またなきものとうつくしめるが、又庶子保三郎(後に正満と改めき)を愛すること、毫も所生と異なることあらざりけり。げに長閑なる千賀が心の春風よ。光風霽月の如き一點くもりなき千賀か心よ。世に庶子を愛して、所生と異ることなきもの、果して幾何かある。

千賀が心は、かくばかり温順なりしかど、また徒らに卑屈優柔にはながれず、事にのぞみて果敢さけざる氣節を有せりき。この氣節、折にふれて、よくその光鋩をあらはしぬ。

安政の五年、戊午の大獄起り、朝野の有志相尋ぎて繋囚せらる。豊作、亦朝紳の間に往來し、密勅請下の事などありしかど、夙く、幕吏に目ざゝれて將に捕はるゝへうなりぬ。かゝる程に闇の夜にまぎれて、窓より逃れ、ひそかに水戸藩邸大野謙介の家にかくれけるが、後幾何もなくてみまかりぬ。されど、人はさりともしらざりけり。かくて、行方知れねど、幕吏はその知る、事もやと、家族をとらへて問ひきはめけれど

いかで明になるべき、詮方なくて、空しく囚獄の中に下したるのみ。辛酸の裡に、月日を過ぐしたる人々の心やいかゝなりけむ。まして、夫の身をきづかひ、子等のありさまを思ひつゝ、おきふししけむ千賀、その腸やけに九廻したりしなるべし。さる程に、事やう〳〵さだまりて、森之助は父の罪の代りにとて、三宅島に流され、家の人々は、それにて許されぬ。歸り來れど、人の心の秋風は、こゝにも情なく、家もあれ、財貨も失はれて、住むべくもあらず。止むことなく、さる由縁をたよりて、わづかに細き煙をたてつ。

偕老同穴を契りたる夫は、隠れていづくにありとも知るに由なく、頼みにすべき森之助は、遠き島根にさすらひたるさへあるに、剰へ、財を失ひ、家をすてたる、その折柄、あはれ世の常の女なりせば、身も心も消え入りぬべからむを。げにや、歳寒くして、松柏の後に凋むを知り、人、艱難にあひて、その節義を見る。常には和やかなる千賀の心も、かゝる際には、いと強くうごかしがたくなりて、常に夫豊作、又は森之助の志を空しくせざらむとつとめ、よく父兄に代りて、大義をおこせとて、保三郎をせめき。

温順親しむべき愛と、嚴峻犯すべからざる敎とは、深く保三郎の心を刺激しぬ、いかで

この慈母の教訓を、仇にはすべき。いつか、心をつくすべき折のあれかしと待ちわたりけるに、時こそ來れ、万延の元年。大橋順藏、同志を集め、輪王寺宮を奉じて、義をあげむとする由きこえけれど、やがて、その同志に入りぬ。さて、かくとて訣別をつげけるに、千賀はいたく喜びて、さてこそ豐作ぬしも喜び給はめ、ゆめ、女々しき振舞して、家の名をなげかしぞ。今門出にのぞみて、わたふべきものこそあれとて、さる親戚のもとに預けれきたる太刀と小刀とをとりよせ、告げていへらく、この小刀は、汝の父豐作ぬしの常に佩ひ給ひしものそ。秋水滴らむばかりの切先には、鋭き父君の御魂やろひたらむ。汝その御魂を体して、ゆるかせになせぞ。又この太刀は遠き島根にさすらひたまへる、汝の兄の、常に身にそへたるものそ。扱かは玉ちらむ刄のさねには、汝の兄のくもらざる心の影ややとりたらむ。汝その心をとりうしなふことなせぞ。この太刀と小刀とをもちて、父兄に代りて國の爲君の御爲に義をなし、道を行へ。されど、かゝる事は、速にせむと急ぎなぞ、必破れなむものぞ。よく謹めや。汝事をあげなむには、われ等また、縲紲の身となるべきも、そは更に苦しとは思はじ、只汝たに、事をなし得ぞ、われ等の望は足りなむかし。さてもし、不幸にして破るとも、必輕々しく死すること勿れ。失敗は成功の基なり。後に、六十六國の總追捕使と

なりたる頼朝も、石橋山にやぶれては、えどし大樹の中に身をかくしき。後に、万戸候に封せられたる留候韓信も、始志を得ざりし時は、少年跨下の辱をもしのびたりき。これ汝もしれる事なり。一度の失敗におどろきて死を急ぐは凡庸の士の仕業のみ、苟も志あらむものゝ輕々しくすべきことかは、徐に、後擧を謀るべきこそと。その言諄々其の意切々、保三郎深く感銘し、涙を揮ひてゆけり。嗚呼かくの如き教訓、かくの如き熱誠、げに人を金玉になすものとやいはまし。之につけても思はるゝは、千賀が心事なりけり。之を花にたとへむか。雪を凌ぎて香たかき寒梅の花。之を月によろへむか。碧空にかゝりてきよく、萬里くまなき秋の月。

大橋氏等の義擧も、遂にとぐることを得ず、歳華めぐりて文久元年となりぬ。この年幕府赦を行ひければ、捕はれたる人々の、許されたるも多かりき。森之助も許されて、島よりいでゝ、歸國の途につきぬ。かくときゝて、千賀大によろこび、さて思へるは、今わが家相傳の甲冑寶刀、親戚志賀氏の家にあり。たとひ、一家亂離の后なりといへども、若し之を家に存せずは、我何の顏ありてか森之助に對せむ。八重の潮路をへだてたる孤島に、うき月日をおくり、つらきおきふしを經つゝ、やう〳〵歸り來る人に、またかくの如きことを聞かせむは、心苦しき限なり。いでや、今の程にと、保三郎をし

て之をとりかへさしめむとしき。さるに、志賀氏は答へらく、甲冑は何時にてもかへさむ。されど、太刀の方は、去歳より此の方、數月の間、千賀及勇が、我が家に寄食せしその折、薪米の料に苦しめる事ありて、止むことを得ず、その外飾をときて黃金にかへたり。さるからに、更に外飾を裝ひて、甲冑と共にかへさむと、千賀之をきゝて心やすからず。我等二人、しばし寄宿せるからに、げにも薪米の料に窮したらむ。然るはあれど、そを我にだにつけなで、また外に術もありつらむを、かりそめにも傳家の寶器なり。一言の告[illegible]もなく、その外飾をとくとは心得ぬ仕方かな。よし、われゆきてその故由を詰らむに、思ひたちたる心やみがたかりしが、人々の諫によりて、やう〳〵とゞまりぬ、千賀の遺憾げに限りなかりしなるべし。

れく露も霜とむすびかはりたる、同じ年の十二月二十五日。志賀氏の方より、書簡をそへて、甲冑と刀とをかへし來れり。甲冑は舊のまゝなりけれど、刀は是新しくよそほへるもの。千賀之をみて、いかで心の激せざるべき、滿身の熱血盡く溯り、忽ち眩暈して終にたふれぬ。人々驚きて、之を扶け、やう〳〵臥せしめて、枕頭に侍り、いかなるさまぞと憂ひつゝありけるに、千賀は、微なる息の下より、聲をもらして語らく。我生きてありながら、傳家の寶器をかくならしめたること、口惜しききはみなり。

森之助歸り來らで、我いかにか謝すべき、謝せむ辭を知らずと。いひをはりて息もたゆばかりなり。げに傳家の寳器の装を、一言の告知もなくときたることは、いたく千賀が心にせまれるなりけり。口惜しとの念は、千賀が胸にみち〳〵て、終にはかゝる病の床につくべくなれるなりけり。かくて同じ月二十八日、霜白き朝、空しく刀と書簡とを睨みつゝ、終にゆきぬ。

あはれ、家を治め、夫をたすけては、その心温順にして、難にのぞみ、事にあひては、その氣節稱ふべからざりし千賀は終に逝けり。寒梅散り、秋月かくれぬ。されど、その香は、散りたる後も薫りたかく。その光は、隱れたる後もなほ清し。

夫豊作は聖代の榮譽をうけて赫々たれど、その內助の妻は未天下の知遇を得ず。いかでかゝる理あらむ。今殘りたる香をたづね、かくれたる光をあらはして、いさゝか諸嬢にまで。

家政



たちぬひ

西山たい子

(五十五)尺三寸巾物の下着まはりの裁方

(一尺三寸巾下着圖り裁方圖)

三寸五分	四寸五分	五寸
えり	衽	半袖 丈け三尺
	衽	半袖

四寸	九寸
ふり	後 丈け二尺
ふり	後
のこり	前
	前

總計一丈四尺

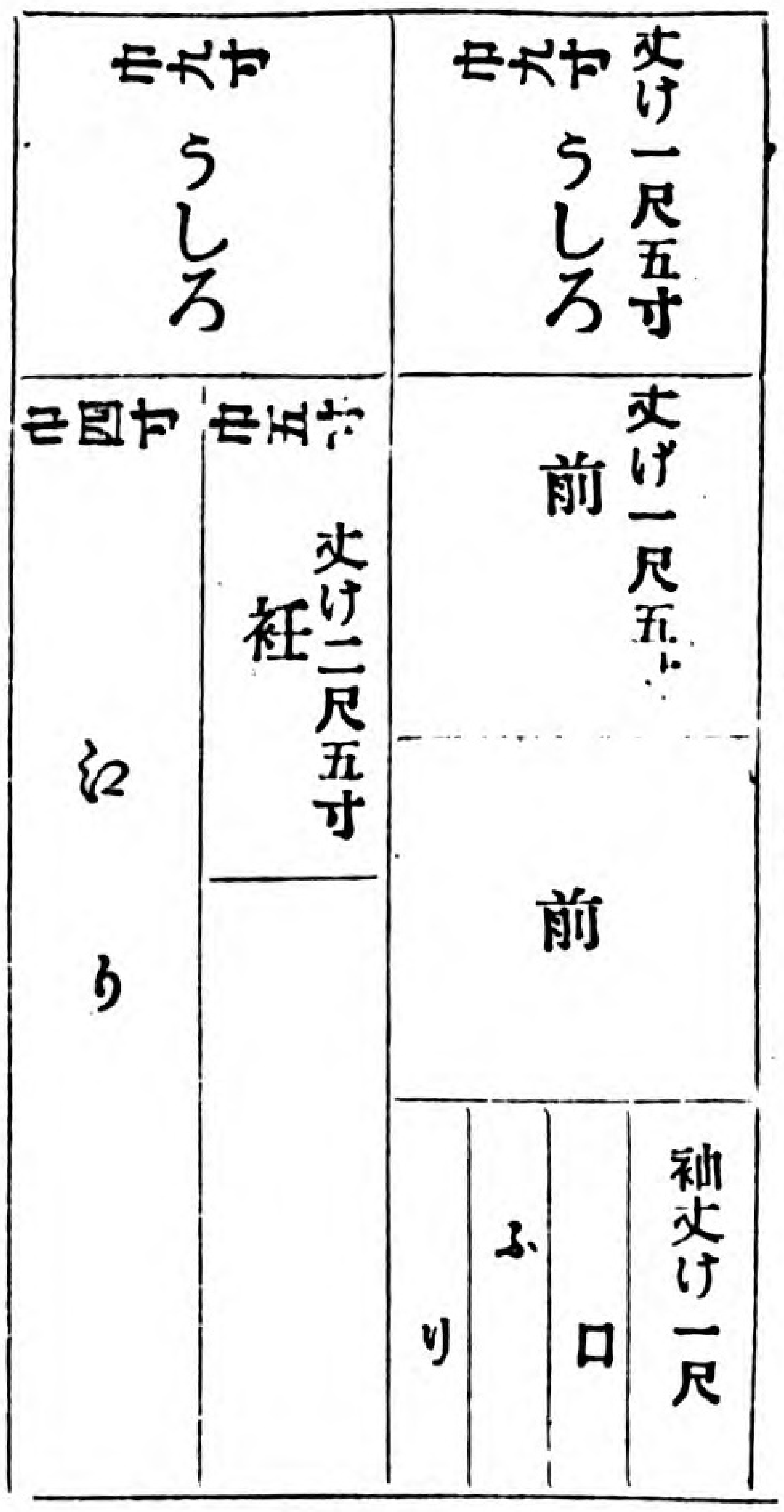
圖の如くまづ兩袖の丈けだけを切り、そのとりたるものの巾より半袖の巾だけを縦に眞直ぐにとりて二つにたち、殘りより襟をかきとり、その殘りを二つに切りて衽とすべし。

また巾にて殘りあるものを、胴の巾をきめて、縦にまつすぐにたち、兩方ながら、四つにきりて、身と、

ふりとにすべし。
但し之はたつぷりなる切れにての裁方にて、丈けちゞめ、袖口、ふり等をみぢかくすれど、今少し短かき切れにて裁てるなり。それは、その切れの長短によりてたつべし。

（五十六）同大巾物にての裁ち方

（大巾物下着圖の裁方圖）



總計六尺五寸

圖の如くまづ丈けをはかり、後を巾にてとり、殘りを縦に眞二つに裁ち、一片を衽と襟とにし、一片を前と袖口とふりとにすべし、之も切れの長短により て裁つべし。

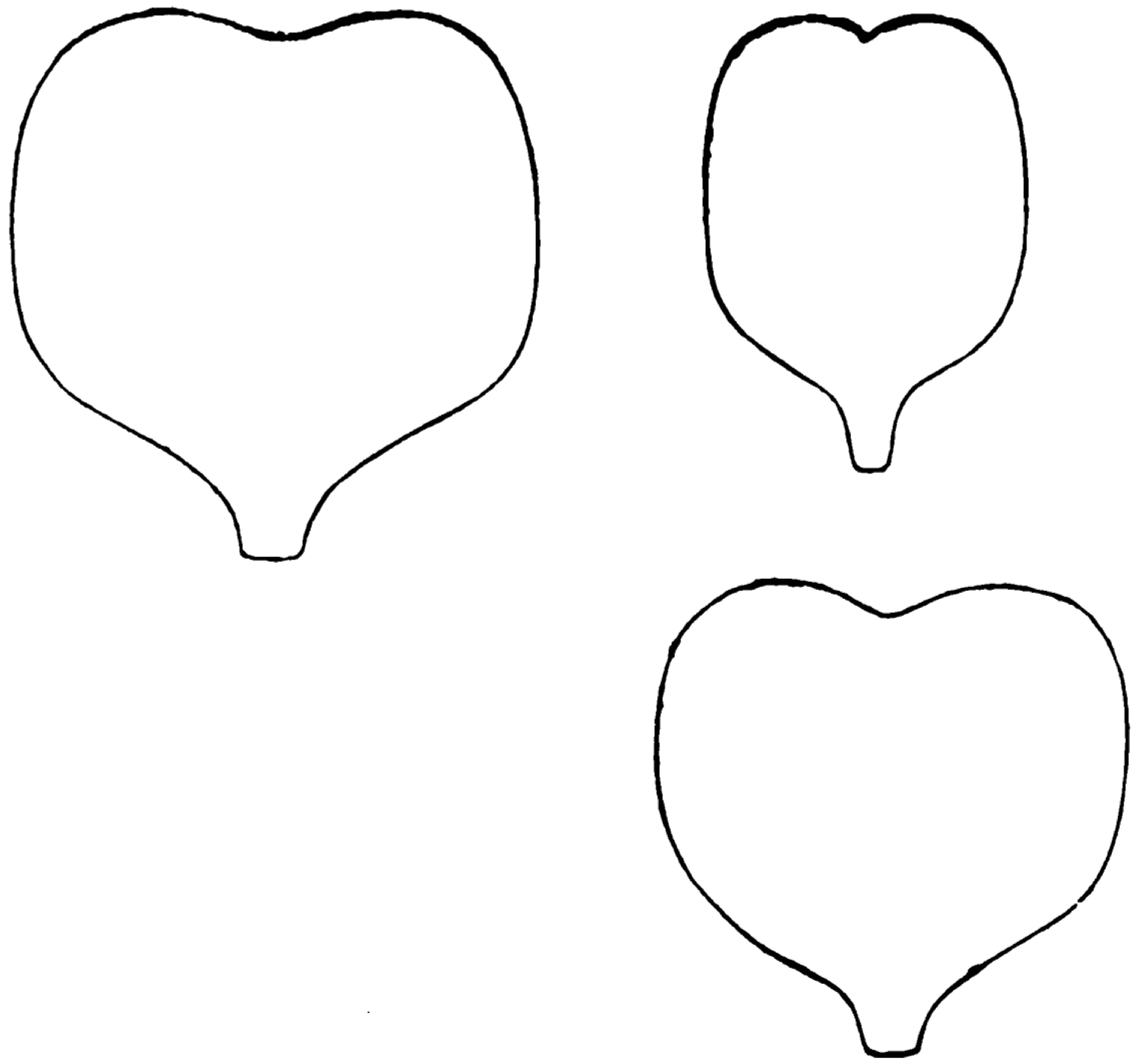
造花

共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

椿

椿は其の種類極めて多くして、概そ二百八十種ばかりもありといふ。されど造花には、其の内にて、最も廣くありふれたる一種をしらべ、他は皆之を應用して、適宜に造り得べし。されど茲には、只普通なる者にて、白と紅との斑ある美麗なるもの丶造り方一つを示すべし。その紅地に白の斑點ある者を、八重絞といひ。白地に紅の斑點ある者のを、都鳥といふ。
滿開の造り方。花瓣には、寒冷紗又は羽二重を用ひ

て、第四十一圖の如き形に、實物を見合して適宜の大さに三種を造るべし。一個の花には小六枚、中九枚、大十二枚を要す。



第四十一圖

色染法は「フロクシン」。「スカレット」各五分を少許の微温湯に溶し、之に極薄くときたるのりを加へて能く攪拌せ、羽二重ならむ其の儘、寒冷紗ならむ一度濕して生乾きの時、筆にて繪の具をふくませて、花瓣を下に置き、上より其の筆を打ちて斑點を散しかけ、實物に彷彿たるやうに造るべし。斯くして后、能く之を乾かして、小の花瓣は中の瓣鏝にて兩端を少しく内部に卷き反らしめ。中の花瓣は、其の裏より鏝を使ひて兩端をそり反らしめ、表は中央を大の鏝にて少しく凹ますべし。大の花瓣は中と全し樣にすべし。

蘂は、針金を二つに曲げて、其先に、綿を第四十二圖の甲の如く卷き付け、之をのりにて固め乾かすべし。別に寒冷紗をとりて、元のまゝに薄糊を引き、乾きたるのち、横三寸五分縦七分に斷ち、之を縱に六

分の處まで、巾五りつゝに斷ち、筋鏝にて、其片々を縦に引き、殘りの一分の處にのりをつけ、前につくりたる綿の回りに之を巻き付け、乾きたる后、其先を撮みて之に濃きのりを付け、黄色に染めたる酒中花（山吹の幹の中に在る眞を取りて、之を薑擦子にておろし「オウラミ」にて染め、之を布につゝみて其液を絞りとりて乾したるもの）の中に突き込むべし。かくすれば、恰も蘂に花粉の付きたる如くなるなり。第四十二圖の乙の如し。

第四十二圖

甲



乙



この蘂を少しく隔てゝ小の花瓣三枚を適宜の配置にてつけ、其間々に他の三枚をつく。かくの如くして漸々に、中九枚、大十二枚を付け終るべし。蕚は寒冷紗を用ひ、第四十三圖の如き形にして適宜の大さに、大五枚、中小各三枚の蕚瓣を造るべし。色染方は、大の蕚瓣は先を少しく花瓣と仝じ繪の具にて模糊し、元は「オウミ」六分「グリン」一分を合せたる液にて薄く模糊し。中小は中央を「グリン」一分「オウラミ」六分の液にて糊模し、兩邉は白のまゝにて殘すべし。かく色染めをしをはりて乾きたる后、瓣鏝にて少しく丸みを付け、之を花瓣の元に、大五枚、中小各三枚を順次に、適宜の配置に付くべし。

第四十三圖





半開の造り方、半開は、滿開の中小二種の花瓣を用ひてつくる、蘂、萼、纏め方など皆滿開と仝じ樣に造るべし。

蕾の造り方。蕾は第四十二圖の甲と仝じものを造り之に直ちに萼を付くるなり。萼は辨鋏にて滿開のものより、深く凹ますべし。偖小なる蕾は、蘂の眞に萼瓣の中と小のみを付け、薔薇の葉と仝じ樣の仕方にて燭にて光澤を付くべし。

葉の造り方。伽羅子を「オウラミ」七分「グリン」三分にて染め、乾きたる后、其表裏兩方よりのりを引き、別に「セルリン」五分「レモンエルロ！」四分を熱湯にて溶し、冷めたる后、前の布の片がはに引き、后、



實物をとり來り、夫に合して形をとり、其裏より鐵の針金に青紙をまき付けたるものを付けて葉柄となす。后筋鏝にて表より葉の筋をつけ、裏より辨鏝にて脹らみを付け、燭にて光澤をつくるなり。

莖には、薄美濃を「カシトラバル」にて染めたるものを巻き、適宜の意匠によりて好みの形に造るべし。

だいどころ

醃藏牛肉

牛肉三斤を三四片に切り、之れに鹽を能く擦り附け能程の桶に投れ、其肉の沒する程水を注ぎ、之れに二つかみ許の鹽を加へ、其加減を試る爲めに、生鶏卵、又は馬鈴薯一個を水の中に投じて、浮上らざる時は、まだ鹽の足らぬ證なれど、水上に浮上る迄鹽を投れ、其浮上りたる時を度とし、此中に小匙一杯の硝石末を和し、能くかきませて後、肉を此中に列べ、上に壓蓋を置き、其上に重き石を載せて、二十時間ほど壓し、翌日に至り、鹽水のみを鍋に取りて沸騰たせ、其冷めたるを待、又桶に戻し、元の如く、壓をなし、二周間の後、肉を「スーフ」鍋に取り、之れを沒するまでに冷水を注ぎ、一時間程文火にて煮るべし。煮ゑ熱したれど、火より下し、肉を出し、其冷めるを待ち、小口より、二三分程の厚さに切り、四五片を皿に盛り、芥子、及び洋芹の嫩芽など添へて出すべし。

牡蠣カレー

先づ二三十個の、牡蠣の殻を剥きて、其液汁を鉢にとり置き、玉葱一個（日本葱にても宜し）を細かに刻みて、之れを大匙二杯の牛酪にて煎り付け、其褐

色になりたる時、大匙一杯の「カレー」粉少量の食鹽、細かく刻みたる一個の林檎に、尚大匙一杯半の「クリーム」を加へて能くかきまぜ、鍋の蓋をなし、十四五分間文火にて煮たる後、牡蠣及び其液汁を投れ、木の匙にて能くかきまはし、小匙一杯の「レモン」汁を加し、尚十分間程煮て、飯と共に皿に盛りて出すべし。

豚肉鹽漬

鹽三斤、白砂糖、百二十目、硝石末六匁を水三升の中に、和し、之れを沸騰たせ、其泡を去り、桶、又は鉢に豚肉三斤を四五片にきりて投れ置き、前の鹽汁の冷めたるを待ち、之れを豚に注ぎかけ、蓋をなし、目粘して二三週間乾きたる場所に置くべし。

學園



日本文典（二十三）

鹽井正男

なほ助動詞の種類をあぐれば、

六　能動助動詞

これは、わが力によくしかするといふ意をあらはすに用ふる助動詞にて「る」「らる」などいふ語あり。

例へば、

一時間に一里の道は行かる。

いかならむ寒さにも堪へらる。

人のすべき程の事は、われもせらる。

などいふ如し。此の詞の活きざまをいはむ。

＝る。

これは、

將然	終止	連用	連体	已然
れ	る	れ	るゝ	るれ

といふやうに變化して、此の詞は、四段活用の動詞と奈行良行の二變格の動詞との將然の格の下につゞきて、能動の意をあらはり。例へば、

うたは、やまとからのもよまる。

父母をさきて、いづくへか去なるべき。

いつまで斯くて居らるゝ此の世かは。

等にて知るべく、なほ古今集の歌に、

春毎に流るゝ河を花と見て

をられぬ水に袖やぬれなむ。

或は伊勢物語に

目には見て手には取られぬ月の中の

かつらのごとき君にぞありける。

のれは、やがて、此の「る」の將然の格にて、その下に否定助動詞の「ぬ」（ずの活きたるもの）を添へて、「をること出來ない水」「取ること出來ない月の中のかつら」といふやうに能動を否定したるなり。

＝らる。

この能動助動詞は、

將然	終止	連用	連体	已然
られ	らる	られ	らるゝ	らるれ

といふやうに變化して、動詞につゞくには、「る」と同じく、動詞の將然の格の下につゞくなり。されど「る」と異る事は、此の「らる」は、四段活用の動詞と

奈行良行ニ變格の動詞にはつゞかず。而して、上二段、下二段、上一段、下一段活用の動詞と加行變格左行變格の動詞とに續くを得るのみなり。例へば、

はやく寢ねなば、はやく起きられむ。
子は黄金にかへらるゝ者にあらず。
富士の山も越ゆらる。
我力にせらるれば、助け奉るなり。
來られたらば、來られよ。

などいふにて知るべし。

七　役動助動詞

これは、たとへば「學校に行かしむ。」「人たる道をればゆさす。」「衣を縫はす。」などいふ時の「しむ」「さす」「す」などいふ詞にて、他をしてさやうに爲さしむるといふ意をあらはす助動詞なり。動詞につゞくには、皆、動詞の將然の格の下につゞくなり。

す。||

此の役動助動詞は、

將然	終止	連用	連体	已然
せ	す	す	する	すれ

と活きて、四段活用の動詞と奈行、良行變格の動詞にのみ續きて、この意をあらはすなり。

例へば、伊勢物語に、

其處なる人に、皆瀧の歌よます。

また、たなじ物語に、

女、楓の初紅葉を拾はせて、歌をよみて書き置く。

また、枕の草紙に犬翁丸のことを云へる所に、三月三日に、頭辨、柳のかづらをせさせ桃の花かざしにさゝせ、櫻腰にさゝせなどして、ありかせ結びしをり、かゝる目見むとは、思ひがけけむやとあはれがる。

或は古今集の序の中に歌の功徳を云へる所に、

力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神を、あはれと思はせ。云々

などある「す。」「せ。」にて知るべし。なほ「往なす。」「居らす」などいふにて變格の詞にもつゞくを知るべし。

この役動助動詞は、

さす。

將然	終止	連用	連体	已然
させ	さす	させ	さする	さすれ

と活きて、これは前の「す」と異りて、上二段、下二段、上一段下一段、活用の動詞と加行、左行變格の動詞との將然の格の下につゞきて、この意をあらはすを得るなり。前にあげたる枕の草紙の例の中に

頭の辨、柳のかづらをせさせ。

とあるさせは、この助動詞にて、なほおなじ物語りに加茂の祭り近き頃をいへる所に、

わらはべの頭ばかりあらひつくろひて、々、けいし、くつなどの緒すげさせ。、裏させなどもてさわぎ云々

とあるさせもおなじものなり。なほ「朝早く起きさす」「花の木を植ゑさす」「よき衣を着さす」「此方へさす」など、常にいふにて知るべし。

此の役動助動詞は、

しむ。

將然	終止	連用	連体	已然
しめ	しむ	しめ	しむる	しむれ

といふやうに活きて、これは四段、上二段、下二段加行變格、左行變格、奈行變格、良行の變格の動の下につゞきて、この意を、むねとあらはす。

古今集の序の中に、

春の花のあした、秋の月の夜毎に、さぶ

ふ人々をめして、ことにつけつゝ、歌を奉らしめ給ふ。

神皇正統記の天照太神の御卷に、

天の明玉の神をして、八坂瓊の玉を作らしめ、天の日鷲の神をして、靑幣白幣を作らしめ、手置帆負、彦狹知の二神をして、大峽小峽の材を切りて、瑞の殿を作らしむ

などあるにて知るべく、なほ此の詞は常によくいふ詞にて、「習はしむ」「思はしむ」「讀ましむ」「早く寢ねしむ」「爲しむ」「在らしむ」勉强せしむ」「靜にせしむ」など、今更にことごとしくいふべき要もあらずかし。

新古今和歌集講義（二）

鹽井正男

春歌上

春立つ心をよみ侍りける　　攝政太政大臣

みよし野は山も霞みて白雪の
　ふりにし里に春は來にけり

○いと調べ高く、けしきある歌なり。○攝政太政大臣、此の集に攝政太政大臣とあるは、すべて、後京極殿藤原良經公の事なり。藤原の兼實の子にて、書に畵に博く才藝に富みたまへるが、殊に歌は上手にして、彼の定家卿さへが、攝政殿は誠に天性不思議の堪能なりと痛く感じ云へるほどの人なり。○みよし野、大和の國なる名所なり。○山も霞みて、「山も」とあるもといふ詞に、よく心をとめて見るべし。「も」は俗にいふ「まで」といふやうなる意なり、されど「山まで霞みて」といふ事にて、野など他の所はもとより霞みたりといふ意を含めたるなり。○ふりにし里、昔、吉野は離

宮ありて、代々の天皇も屡行幸あらせたまひし所なるが、其の後行幸も久しく絶えたれど、舊りにし里といへるなり。さて「舊る」は「降る」と同音なる縁によりて、白雪のふるといひかけたるなり。而して、また近き頃まで白雪の降り居りたるけしきをもいはせたるなり。されど、此の白雪のふりにし里といへる意を詳にいひつくさど「近き頃まで白雪の降りて居りし故郷」といふやうなる意なり。

○一首の意は、近き頃まで雪の降りてのみ居りたる故郷の吉野に、山までが霞みて春が來たりしよといふ意也。

春のはじめのうた　　太上天皇

ほの〴〵と春こそ空にきにけらし
天の香具山かすみたなびく

○太上天皇、後鳥羽上皇の御事なり。○ほのぼのと、俗にいふ「ほんのりと」といふ意にて、この詞は、天の香具山にかけて見るべし。「ほんのりと天の香具山に霞みたなびく」とつゞくなり。「ほんのりと春が來にけらし」とつゞくにあらず。かゝる語句のつゞきざまは、歌にはまれ〳〵見るものなり。これ、歌は語數などの定めあるものから、直に近く句を續けかねて、斯く離ちて置くことあるなり。○來にけらし、らしといふ詞は、やゝ證據とすべきものを以てかくあらむと推し量りいふ意の詞にて、俗にいふ「ラシイ」とか「ソウナ」とかいふやうなる意なり。されど「來にけらし」は「來たそうな」或は「來たらしい」といふ意なり。なほらしのことゞ、日本文典二十一回目のわたりに詳しく申し置きたれど、それ見られてよ。○天の

香具山、大和なる山の名也○たなびく、「なびく」といふと同じことにて「なびく」の上に「た」といふ接詞の添はりたるにて、なほ「忘る」を「たわする」といひ「とはし」を「たとはし」といふが如き類なり。

○一首の意は、空にそびえたる天の香具山に、ほんのりと霞がたなびくよ、さては春が空に來たそうなといふ意にて、空に來にけらし」の「空」と「天の香具山」の「天」といふ詞を相對したる所が、いと巧みなる所にて「天の香具山」の「天」といふ詞がいと必要なるものにて、これより「空に」といひ出でゝ作りなせるなり。此の集の頃の歌は、かゝる所に、いと細工をこらしたり。

漢文學講義（一）

大林弘一郎

緒言

漢文とは、何時の頃より、誰が言ひ初めたることなるかは、明に知り難けれども、支那學を講ずるを漢學を講ずるといひ、支那學者を漢學者といへるなどより考ふれど、支那文を漢文といへることなるは、明なり。さて漢は、支那の中古にて、頗文學の盛なりし時代にして、兩漢（西漢、東漢、又、前漢、後漢、）の間に現れ出でたる文章といへど、文選（魏の昭明太子の撰）などに載せられたるものを初とし、史記（西漢の司馬遷が撰）、漢書（後漢の班固が撰）劉向說苑、新序（劉向の撰）其の他の書、今に存するもの多し。就中、史記、漢書は、はやく我が國にも傳はりたれど、奈良の朝よりこのかた、男子はいふまでもなく、女子にても、物まなびの道に

志したらんものは、これ等のからぶみを讀み習ひたることは、明なり。かく久しく、我が國に關係ある漢文なるゆゑに、いつしか、から（唐、又は、漢とかけり）ぶみといへるが本となりて、漢文といふに至りたるなるべし。

さて、今代にいたりて、専、漢文をもて、普通の稱呼となし、既に、文部の省令にも、漢文と書かれたれば、これはた、支那文の總稱とはなりぬ。故に、今、普通の稱呼によりて、漢文學と記し置けり。されど、予が持論よりいへど、支那文とか、支那學とかいひたきことなり、何となれど、唐虞の文もあり、周秦の文もあり、また、六朝、隋、唐の文もあり、宋元の文も、明清の文もあれど、概して漢文とのみいふべくもあらぬことなれどなり。これは、一とわたり、支那歷代の文を見ど、いはずともしるきことなり。

又、支那より來れる文章を漢文といふのみならず、我が國の學者たちのものせられたるをも、その文體によりて、支那風にかゝれたるは、今、皆漢文といひならはしたれど、これは、日本製の漢文、即支那文なり。これも、國文に對しては、しかいはでは別ちがたかるべきことゝぞ覺ゆる。

かゝる稱呼は、ともあれかくもあれ、この支那文が、我が國の文學となりたりしは、既に二千年にもなりけることなれど、我が國の固有のものと異ならず。六國史（日本紀、續日本紀、日本後紀、續日本後紀、文德實錄、三代實錄）古事記大寶令、貞觀格、延喜式、類聚國史、古語拾遺などの古書を初とし、懷風藻、朝野群載、本朝文粹、續本朝文粹、菅家文章、經國集などの詩文集の類より、近代名家の著書、史籍、文集の類に至るまで、

世に存するもの實に夥しきことなれど、我が國の學を修めんとするには、かならず一わたりの漢文を讀み得る力を養はざるべからず。況んや、中古以來の國文の中には、漢文より根ざし來れるふし〴〵のあまた見ゆるものあるをや。その本をたゞさんに、いかで、これを捨つべけん。今、一步を進めて、和漢の歷史、東洋の文學、道義などを博く究めんとならむ、必、ふかく漢文を見きはめざるべからず。されど、これは、專門の學者に望むべきことにて、即中等以上の敎育を受くべき人にこそ必要なれ。それまでにいたらぬ人々には、あながちに責むべきことにあらず。

現今、我が國の學制にては、女子の修むべき學科は、高等女學校の程度、即中等敎育に止り、女子高等師範學校はあれど、これも高等なる普通敎育を授くるに止り、殊に、女學校、師範校の敎員を養成する目的をもて、立てられたるものなれど、一般の女子は、高等女學校にて、中等の敎育を受くる外、自修によらざるよりは、他に良師を撰びて、從學するに非ざれど、高等なる學問を修むる道なきなり。高等敎育の女子に必要なるや否は、予別に意見あれど、こゝにはいはず。

今、一般の女子は、中等敎育を受けて止むものと假定して、今日の學制もて之を敎育する上より考ふるに、女學校には、國語を必修科にれきたれど、漢文は、隨意科に入れられたり。女子は、もとより男子と異なれど、課程も少しく易くせられたるは、さることながら、中學校にては、國語、漢文ともに、必修科に入れられたれど、予は、女學校にても、必修科に入れらるゝことを望むなり。何

となれど、女子の普通の學を修むる上に就きても、又、專門高等の學を修めん便となさんにも、必漢文に要すべきこと多きを知れどなり。至りて微細のことよりいはゞ、まづ、第一に日用使ひ來れる文字を見よ。これ、多くは、數多の意義を含める漢字なり。（國語と假名とによりて、普通の用は、足るとも、）この文字を使ひ用ゐて、その意義を誤らぬ程にいたらんは、むねと漢字を讀まざるべからず。又、何くれと世に在りあふ文どもの中に、男文字にかきたる節あらんに何の事しるしたるかをも知られざらんは、いかにも不便のことなるべし。これかれ考ふるに、之を正科に加へて必修せしむるこそ至當の事と覺ゆれ。今、各地方の女學校にては、隨意科なれどとて、全く廢したる所もなけれど、杞憂といはるれど、さることなれど、こゝには、思ふまゝをいふなり。

先年來の歐學の盛なりし爲、漢文は一時けされて、その勢のいとも衰へたりしことは、世人のよく知る所なり。今日は、やゝ、その氣運も移りかはりて、たしかに、世に捨つべからざるものなることは、知られたる如くなれども、なほ、世には、漢字全廢説なども見ゆるやうなれど、破壞的の論者は、いつまでも、絶ゆる時はあらざるべし。たゞ、學ぶものゝ心をたしかにして、志をかたくし、己の學ぶべき所をつとめて、浮説に動かされざらんことをつとむるにあるのみ。

さて、漢文を修めんには、先、何の書より始めて讀み習ふべきかといふに、予は必しも、昔時の如く、四書、五經より始むべしとはいはず。先、その文の難易によりて順序を立て、學力の程度に應

じて、漸々、高遠なる方に進ましめんとするなり。こは、近來漢文讀本類も世に多く出で丶、それ〴〵注意して編纂したるものもあれど、予は、是等諸本を見て、なほあかぬこと多く覺ゆるゆゑに、今一層、講讀の法を精しくせんと思ふなり。國文にも、上古文、中古文、近古文、近代文など各時代によりて、文躰の異なれるが如く、漢文にも、亦、殊に時代の變化多くして、同じく漢文とは、いへど、決して混合して讀み得べきものにあらず、初學の者の誦讀に便せんとするには、先、時代によりて、書物を順序し、そのうへに訓點を正しくして、國語と相そむかぬやうに讀み習はしめざるべからず。古來の學者たちにも、訓點に心を用ゐる力をつくし丶もあれど、たゞちに今日に適用すべきものにもあらず。要するに、よくその文の意義に通ずるやうに讀み得て、漸々高遠なる文義を解するに至らば、訓讀のことは、それにて足りぬべし。

訓讀の事既に終れば、その次には、時代に從ひて字義に相違あること、用ゐる所によりて、字義のいたく變ずることなど、極めて精細なる研究をも爲さゞるべからず。かゝる類のことなほ多し、つぎ〳〵に後に述るを見て知るべし。

さて、専門に修めん人の爲に、讀むべき書目の大略を擧げば、先、我が國の書にては、

皇朝史略 青山延于　日本政記 頼襄　日本外史 同上　國史略 菊池純　日本八大家文 石川英　新論 會澤安　弘道館記述義 藤田彪　大日本史 徳川光圀　六國史　本朝文粹

等その他の文集、雜著は、多く讀めば讀むに從ひて益する所あるべし。

漢書にては、

十八史略曾先之　元明淸史略石村貞一（こは我が國にて記せるものなれど支那史略の事にあなればかゝぐ）

五經　史記司馬遷　漢書班固　資治通鑑司馬光　春秋

左氏傳未詳　周禮未詳　儀禮未詳　國語　戰國策未詳　荀子荀卿

管子管仲　十三經漢人の注疏を見るなり　二十二史史記漢書は除く　文獻通考馬端臨　十七史商榷王鳴盛　四庫全書總目提要

皇淸經解　經世文編

等、その他經史の注解、諸子百家の書極めて多し。我が國に傳はらざるものは、いかに見んと思ふも詮なければ、我が國に渡りたるものにて目に觸るゝかぎりは讀みて、見聞をひろめんことをつとむべし。普通の漢文一わたり讀まん料には、今、世にありふれたる漢文讀本の類にて、よく撰び定めなば適當の書あるべし。單に女子の讀むべきものとして編纂せるものは、未、出版せしものなし。中學讀本の中に就きて、その大略を擧ぐれば、

中學漢文讀本秋山四郎（金港堂）　中學漢文讀本松本豐多（吉川半七）　中等漢文軌範羽田安政等（松榮堂）　日本漢文學讀本中村鼎五（近淸堂日黑支店）　中學漢文讀本（國光社）

猶この他にも、數種あるべしといへども、大抵同じきやうなれど、こゝにはあげず。

予は、女子の讀むべき好材料を用ゐて、女學校に用ゐるべき一の讀本を編せんと思ふこと久しけれど、未、その暇を得ざれど、暫、この欄に於いて、ろの一斑を撰り出で、その文義をも解釋して、讀者諸孃が勉學の一助ともなさんことを期するになん。

（つゞく）



漫錄

國字孝經（一）

あ、ま、

この一編はいつのよに、誰がものせりしといふことをしらず。いとふるき寫本なりしを、文政のころに、ゑり卷にものせりしこと龜田鳳齋翁の序文に見えたり。その版本今はうづもれて、世に見る人もすくなけれとて、こゝにとりいでつるになん。

國字孝經叙

古昔寧樂朝肇立二學令一、經學以二孝經一爲レ先、而敷二教於天下一矣、四條帝時、綱紀雖レ弛、其教弗レ癈、是以天福中班二賜古文孝經一本於民間一、愛二養黎民一之至意、良歷代未レ有レ之曠典也、大江千尋四方游歷之日、到二筑紫觀音寺一、遍二拜菅公之靈蹤一、其夕止二宿民家一、明日阻レ雨不レ發、淹留三日、主人憫二雨中無聊之情一、探二架上塵間書一、以慰二其悶一焉、其中有二古寫本國字孝經一本一、其文頗古雅、其書亦不レ俗、紙渝墨敝、古香馥郁、實三百年以上之物也、於レ是懇求レ之、主人亦似レ不二甚惜一焉、乃挿レ裝而歸、一日携來而謁レ于レ余、々一閲レ之、其言簡古而其辭高尚其義闡明而無二餘蘊一矣、非レ如二後世俚諺解之鄙俚一也、因考レ之此書國字直說、不レ過レ翻二經文一則爲二民間愚蒙者一而

作焉耳、其門分二二十二一、則從二古文一者無レ疑矣、以二其辭一考レ之則出二於當時縉紳君子之手一者歟、夫庶民之愚、惡識レ讀レ書、然則天福中所二班賜一之本、亦或不レ過二國字直說一如レ此者耶、抑此本或亦得レ非二天福之遺一耶、於レ是慫二慂之一、使下壽二諸梓一而布中于世上、庶下平國家敎二民間愚蒙一之一助上云爾、

文政紀元戊寅冬十一月　關東　龜田興撰

むかし天下に、昔も今も又たぐひれはせざりける聖の御徳は、大ぞらにみちはゞかりておはしながら、そのかみ世の中騷がしきほどにて、時の御覺ゑもはかゞ〳〵しからねど、つかさ位をも辭し給ひて、たゞ〳〵かしこき道をのみ行ひいましたりけるなん、いまろかゝりけるむかしこそあれ。世うつり[illegible]かはりての後、つぎ〳〵の帝王ろの御德をしのび給へるあまり、れはきみの位をさへれくらせ給ひて、いとも〳〵めでたうたふとませ給ひにける。されど、世にありとある人、其の道をまねび、其の御をしへにしたがひ聞ゑざるたぐひやはあらん。世にれはしまい給うけるほど、他國よりも參りつどひ來て、つかへまつはれ奉り、みでしの數三千人ばかりなりしとか、中にすぐれたるを物にしるしのこしたるも、七十二人なんありける。

一日、けふは人も參うこず、つれ〴〵にて、みでし何がしたれもかうざくなるが、たゞひとりのみさふらひけるに、師の給ひ出でけるは、いかにそこにはいにしへの國王かぎりあき御德れはしまし、まつりごとの筋いみじくて、上はしもをいたはり、下はかみをあふぎ奉りて、上下むつまじう、天の下やすらげくて、なべて人の心いみじうすなはなりしゆゑよし知りたりや。との給ふに、なにがしいとかしこま

りて、をさなき身にはいかゞは、今いでやいとかしこき事、いかでをしへさとし給はらなんといらへ申すそも〳〵親につかふる孝の道といへるはしも、よろづの道のみなもとにて、なべてのをしへも、たゞこれよりなんはじまりぬる。さは、いで、こまかにかたり聞かせてん、いはんもさらなることながら、人の身の五体といへる、父母よりうけつぎたる物にしあれど、千筋の髪のたゞ一筋も、いかで〳〵おろかにやは。今つまもとあなずるのはかなきにだに、露ばかりもきずつけざらんやうにと、世とともに用意しつるを孝の道のはじめとおもへ。よろづの才ども打まねびて、時世に用ひられ、かしこき事し出で丶父母のうへもめでたう聞え知られて、末の世にも、いみじき名をつたへたらんを孝の道のとぢめとこそするなれ。されどはじめは親に仕へ、さて宮づかへに出でたちては、いかにも〳〵實法にありへて、つかさ位のたかきにものぼりつゝ、はじめ終とゝのひたらんが、よろづよりも人の道をなしはてたるなんなり。

すべて親を、いとほしかしこしと思はんきはゝ、みだりに人をいみにくみ、おとしめあなづりなど、まさなき心はつかはぬ物になん。いとほしみといへるも、かしこまりといへるは、まづは親につかふるにいたしつくしつべきわざにて、かけんもかしこき限ある御うへにも、此の孝の道だに忘れさせ給はで、その御心のいたらんかぎり、下が下をもあはれみいたはり給ひてんには、なべて御めぐみのかたじけなきを、又なくうれしき事にいひ思ひて、外國までもなびきしたがひ奉らぬはあらじ。されどかうたふとき御ほどには、つかへ奉る人々の、いと〳〵おほか

んなれど、それが中には、御ればねのこよなきも、又さらぬもありて、御心にいりたらんは、わしきもよしとればしなすたぐひ、こゝられはしますべからん、さやうに人わきせさせ給はで、れしなべて御かへりみあらんが、いとしも〳〵あらまほしきわざにてろ。

（未完）

またぬ青葉（つゞき）

故人　香川景樹

五日。

六日。此流にむかひ居りて、つや〳〵れもひおこす事すくなからぬ中に、古年の冬打つけの便をきゝまどひて、我にもあらず難波に下りて見あつかひける間に、なき人語らく、君れはしまさぬさきつころ、病しぜ〳〵せまり侍りて、ものも覺ねぬ夢現の際いつもの様に清水にまうで、瀧の前に休らふほど、瀧の下に立そどみて祈念ずる若人あり、何の願にやとつら〳〵見れど、よしゆきのうしろでによく似たり。さるあひだに、彼の瀧口より、菩薩の御影光明を放ちて落くだり給ふを、やをらろの人むすびうけて、をさめもあへず、打ゑまひてゆくかたは、いよ〳〵よしゆきなりけりと見る程に、人ゆりれこして今都より早く奉れとて、まゐり侍りきと、筒やうのものさゝげ出せるは、彼の清水の瀧の水なり。時も時不思議の事とれもひ侍りしかど、そのころは今ぞかりだにものは言はれ侍らず。一人心にのみこめをり侍りて、なぜいひつゞくるも、猶やう〳〵に苦しげなり。われいへらく、そはそこのみやまひを

ゝもあへず、よしゆきにあつらへくませて、くだしたる彼の瀧のみもひなりさ。日頃念じたまへるが、夢

に入らせ給へるならん。ありがたくもたふときことと、今やがて病愈ねたち給ひて、など慰めものしけり。さて年もくれなんとするに、はかぐ\しきけぢめも見ねず。住吉の里なるたのもし人の音づれさへ、うとく\しき障いできて、いとゞ心細う絶ねけれど、京よりのむかへ人、にはかにもよびのぼす。いつしかとまたせもあへず、師走の廿八日といふあした、ちかとも、其むかへ船の長して來れるを、うれしとは誰かは思はさらん。ふかりの入江に乘すて丶、あがりもあへず、まづふとこ丶ろよりた丶う紙めくものとうでて、よしゆきよりとて、うやく\しうものせるを、やをらひらき見れど、御たけ三寸ぞかりなる、れん菩薩の御影なり。まづとりあへず枕の上にさしいたゞかするを、あき人打見て、いと驚けるれも丶ちして、これぞまさしくかの瀧よりれりたまひし御佛といふに、驚きて皆ちかともに向ひて、いはれ如何にと問へど、語らく、これに不思儀の物語こそ侍れ。最初は君にも見しりたまふらん、さきつ日この難波より御やまひの事つげ來りし時、誰々も侍れど、よしゆきいたくなげきて、其日より觀世音の名號を、千枚の紙にかき奉りて、御命あらむ救ひたまへと、高瀨川の末にたちて、日毎にながせし事あり。一日例のながしはて丶歸らんとするに、猶水底のさゞれにまとひて、留まれる一ひらあめり。やをらかきやらんとするに、今流しける御名にはあらで三面觀音の畫像なりけり。こは願の空しからず、ふた丶び出たまふきずゐにこそとてもてかへり、かく手づから表具して奉られたる此御影にて侍りといふ。あなあやし、高瀨淸水の流はかはるといへども、ゆめうつ丶御影は違はざりけり。猶尋ねかはすに、其

日よしゆきが着たる衣の色、袴のあやに至るまで、彼の瀧の下に見し夢人なりけりとや。この事をなんおもひいでて、此睦月の末おのれもおなじ御名をしるして、此鴨河に流し奉りし時、遙に音羽の峯ををがみて、

春にさへあひけるものをまだかれぬ
梢に花の咲かざらめやは、

と讀て祈りしも、いづれ甲斐なき過世なりけり。抑々此御佛を我念じ奉る事は、昔よりと言ふ程にも、今廿年餘のさき、文化の三とせといふ頃なりけん、おのれ病に臥していま〳〵とわずらひし事あり。友なる佐藤しげのぶ之を悲しみ、彼菩薩の御かたをきざみ奉りて、嵯峨なる岐王寺にをさめたる其日より、日頃になれる食餌をさへ、餓にたうべいでゝ、よろず此世ざまになりたちけり。されど佛躰をきざみて安置するは、やがて御佛其人にかはらせたまふといふ事を、おのれ若きより見聞き奉りたれど、それよりさきつとし、彼の之げのぶ其の妻と共に、痢の病に罹りて、おなじ枕に命かぎりなりし時、いかでと思ひあまりて、我佛なりけれど、ひそかに此御像を二はしらつくり奉りて、彼の岐王寺にをさめもおへず、たちどころにふたりならびていゑたちぬ。之げのぶ其めぐみをむくいかへさんとて、又おなじ御寺におなじ佛をしもものせしなりけり。さるに其後十年ばかりして、又おのれものゝけめく病にわづらひて、月ごろになりけり。一日おもひ起して、彼の嵯峨なる寺に詣で來て、おのが菩薩をひらき拜み奉るに、御腰よりしたほそくと碎けおはせり。かたへにつける小尼法師も、痛くあわてゝ、こは〳〵いつのまのわざぞや。かしこにおがめ奉りすゑて、御づ

しにだに手觸れし事やはある。さりとてあづかりまゐらせて、たがあやまちとせん。かくかたはにならせたまふを、知らざりし罪さへいと恐し。年頃こなたにものし侍る何がしの佛師に仰せて、今にをさめつくろひ奉るべしとさわぎわぶめり。かしこくは見奉れど、さるいはれこそはと、なか〱たのもしき方に思ひとられ侍りし。又三年ばかりを經て、わが岡崎の家をつくりひろげんとする事ありけり。かたはらこぼちもてゆくに、家の左づめと立ちたる太柱のはるか上つかたに、朴の木の柄すげたる小刀五寸許なるつか口せめてはすさまにたてり。木だくみものこそとて拔かんとするに、稍よさびつきたるを強ひて打放つ。こはまがひもなき咒咀のわざなり。何者かなど、うち〱ひそみかんがふるに、それかと思ふ事あり。そとつ年の夏なりけん、或相者ありけり。其人の、かきける歌をふと見て、驚きあわて〱いはく、こはそは此人如何なる人ぞ。まさしく君を呪殺すの墨色なめり。はやく心をしたまへといへりき。なほ私に顧れど、そのしれわざいひれはせられて、ものしけん男は、先頃高き屋より落ちて腰打ちて死けり。うたせたる其人、はたれひつぎて腰痛の病にとられてうせゆきぬ。果して年月を考合するに、其刀うちたる時に、彼御こしは碎け給ひしなりけり、忝なくも景樹が身に替らせ給ひけるにやと、今更れもひあてたるに、淺ましとも哀しとも、さんぎの涙とゞめ難しや。日頃にむくづけき輩も、かく眼前の奇特を拜み畏みて、俄にそゞろき尊むめり。實に。呪咀諸毒藥。所欲害身者。念彼觀音力。還着於本人。の誓願空しからざりけり。披の呪咀人の書齋の名を、〇〇となんよびならせるを思ふ事も、あ

はれ一世の因果にはあらざりけらし。されど世の外ざまの願言は、何事も此御蔭を頼み聞え奉りて、空しからざる中にも、十八年むかしの冬なりけらし。なき人私に詣で、我が爲に女子一人得させたまへとこひ祈りけん、其月よりはらみそめて、生みけるは即ち今の孝子なりけり。

（未完）

列女（その四）

橘の家主人

繪島海女

しら浪のよするなぎさに世をすごす
あまの子なれどやども定めず

海女は播磨の國繪島の漁師の女なり。行平中納言さすらへとなり、須磨の浦にわりし時、釣を垂れてこの島にあそびたまひけるに。しは汲女の中に、みめかたち美はしき少女あり。中納言詞をかけ、汝のやどりはいづくなりやととひしに、とりあへずこの歌をよみければ、いとあはれと思ひて、わりなく契り給ひしが、歸洛の後、思ひこがれて死したりとぞ。

今按ふに、女子として節操正しからざれど、はやく女子たる資格を失へり。西洋の風習を此上なきものと尊びあがめて、我邦のをばよしあしのけぢめなくいひけたむとする輩はしらず、わが邦にては、いかに高貴身なりとて、いかに物學したりとて、一の節操にかけたる處あれど、高貴も高貴とするに足らず、學問はた何の甲斐かあらむ。今の女學生といふ際には、物學としいへど、たゞ書籍をよみ、文字をかくわざのやうにのみ思へるがあるこころ浅ましけれ。さてこそ、家に萬卷の書を積み蠹魚の族となりてだに、なほ行爲修まらず、醜

閫閾外に洩れ、人をして耳を蔽ひ目塞さがしむ。さてもなは誇りがに思ひあがり、妾はさる人の妻となるを欲せず、妾は男子の玩弄器にもあらず、機械にもあらず、同じく生を天に稟けたるもの、いかでか其奴隷たるを甘ずべきなど論へり。されどその裏面を察れど、かの放蕩書生に、甚しきは車夫土方の群に慇懃を通じて憚らざるものあり、而して身教育をうけたる、女學生女教員といふに至りてはいかに驚かずやは。嗚呼節操正しからざる結果は、彼自身をかりて水火の中に投せしむさてころ、心あるものは爪はじきして、これと二道を諾ふを忌むに至りぬるなれ。家庭の重任を負ひ、教育をうけずては得あらぬ身にてありながられのつからなる勢は、かれの父兄鄉黨をして、教育の業につくを恐れしむるに至らんとす、そは中々に無教育なる婦女子のたのむ處あれどなり。かの繪島の海女は區々たる一匹婦にして名だに傳はらず、潮をくみて漸く其日をたくりしもの。さても貴人にかへり見られつるは、一つは美顔にもよりたらめど、かれが謙讓の美德の然らしむる所ならずやは。いふなかれ其身いやしと、その遂に二人に見ゑずして、一の眷顧に酬いけむこのけ高さは、又及ぶものあるべしや。今の高貴なりとて時めける人、物學したりとてほこらへる女子輩、かへり見て耻づる處なきか、希くは戒むる所あらむことを。

菟名日處女

住わびぬわが身投げてむ津の國の
生田の川は名にこそありけれ

うなひ處女は津の國芦屋の里に生れ、容色並ぶもの

なかりき。同國菟原の者と、和泉國血沼の者と二人の男思をかけて、戀ふることしきりなり。父母もいづれをいづれと定め難けれど、ある時父二人を率て川にゆき、一羽の水鳥をさして、今これを射給ひしかたを聟と定めむ、射はづさんには恨み給ふなといひけれど、二人はよろこび、おのも〱矢をつがひて射るに、一人は頭のかたを射、一人は尾のかたを射たり。されど處女は思ひわづらひて此歌をよみ、生田川に身を投げて死けれど、二人の男諸共にその後を追ひき。よりて二人を左右に、處女を中に葬りて、もとめづかと名づけしに、ゆきかふ人袂をしぼりて、香花の手向時じくに絶ゆることあらずとぞ。

今按ふに、二人の男に慕はれたりとて、處女の二人を見る心の內には、なほ必ずや輕重ありしならむ。されど二人が思慕の情の孰れを孰と定めがたかりしなり。あらず二人の情はつゆ異なる所なかりしなり。さては一人のかたにゆかむ、一人は安くはあらじ、一人を得れど、必一人を失はむ。さてはわが愛の度によりて、かにかくと思ひ定むべからず。よし二人の情にむくいむとするには、いづかたへも靡くべからず。よしやわが身を殺すとも二人の身の恙なからむことをいのらざるべからず云かずわが身を殺してと思ひたちぬるにこそ。

さても今世契らざりし人のいかに思へばとて、其身を殺して二人を調停せむとするが如きものはあらざるべし、あらば誠に頑なりとそしり、愚なりと笑ふべし。わが身のために男の歡心をもかへ歡心を得むがために、わが身を忘するゝものあるべしや。あゝ思へば世は澆季となりにけり、あは

れ生田の川は昔ながらに流れゆけども、人情はやく逝く水の歸らぬが如し、ことに女子において甚しきを見る。二人の面もたち、自らの顔をもやぶらずして、而かも後世これがために泣かむずる逆境にたちて、身を處置するはいとかたし。處女の如きはよく道をふみてあやまらず、身を殺して節を全くしたるものともいひつべきか。

こしかた（二）

おこ

あふげどもはてしもしらずたらちねの
　　おやのまもりのたかきめぐみは

二つ三つばかりなる時のことは、よくも覺えず。四つ五つの頃よりの事どもはほのかに覺え侍るなり。わが父にておはしけるは、公のつとめあれど、つねは、家にもゐたまはず。祖父にておはしけるが、つねに、われをいつくしみ給ひて、何くれと心をそへ給ひし。

わが四つになりける春のころにやありけん、祖父三字經をとり出で給ひて、はじめて、その讀みを授け給ふに、文字の形はよくも覺えねど、その讀み聲のみは、そらにしたりしかど、いとめでさせ給ひて、つぎ〳〵に授け給ひて、つひにその一卷をもそらに覺えたりき。足もまだよろめきながら、このふみをたづさへては、祖父のもとにゆきかひしける こと、今もなほ忘れず。

さて、その次には、唐詩選の中にて、先、五言絶句を授けられき。これも、同じく讀みを授けられしなり。題遠氏別業といふより、初めてつぎ〳〵に、一首、もしくは、二首ばかりをいくたびとなく數へ給

ひき。その歳の暮には、その部の半をも過ぐるぞかりは覺えたりき。

五つになりける年、はやくより、手習ふことも敎へられたりしが、いかにも、思ふまゝにのみふるまひしことにて、日々につとむることにはあらざりし。されど、この年のうちには、五言の部も終り、七言絶句の部をも讀み終へたりき。

夜はふしどにありて、母の問ひ給へれど、何となくよみけるに、ふと忘れてよみかぬるふしもありけるを、母のをしへ給へど、またつぎてよみたりしこともたびたびなりき。いま思ひ出づれど、これもまことに大なる賜にてぞありける。

また、同じ年ごろ、書は、何とも定めで、世にめでたき歌ども、おまた敎へ給はりき。陸奥の采女が「淺香山の歌、菅丞相の一よひのまやの歌など、其のかずかぞふるにいとまあらず。されど、戀歌のみは、一つだに敎へられざりし、祖父の君のみ心しらひいとも尊し。また、そのころ、家にありしかけもの、額などのたぐひのものにしるしたる文字をことごとく敎へ給ひしかど、俳句、和歌の短冊にしるしたるものなども、家にあるほどのものは、大かたはそらにしたりき。いまはさうなきまゝに忘れたるが多し。

そが中にも、心に浮び侍るは、仙台の臼人が

立寄れど名月もたぬ松もなし

又は、足代弘訓が歌、

おぼろなる春もすゞしき夏もあれど
猶月かげはあきのものにて

又は、蜀山人か狂歌、

いたづらに過ぐる月日もおもしろし

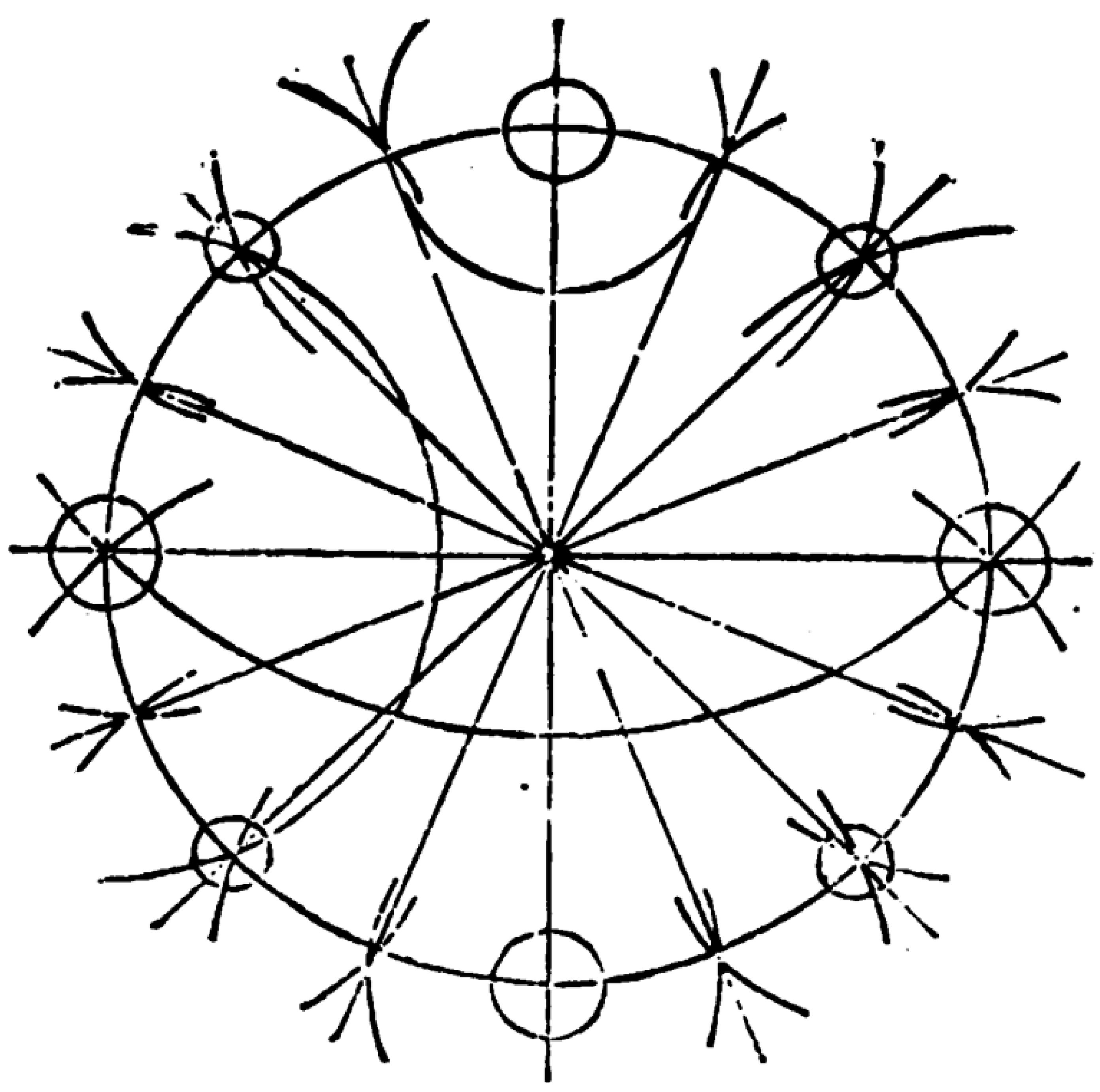
花みてぞかり暮らされぬ世は
など、百中の一二なり。なほ、客人の來て、そゝのかさるゝに、これかれよみきかせけるも、いとをかし。

（つゞく）

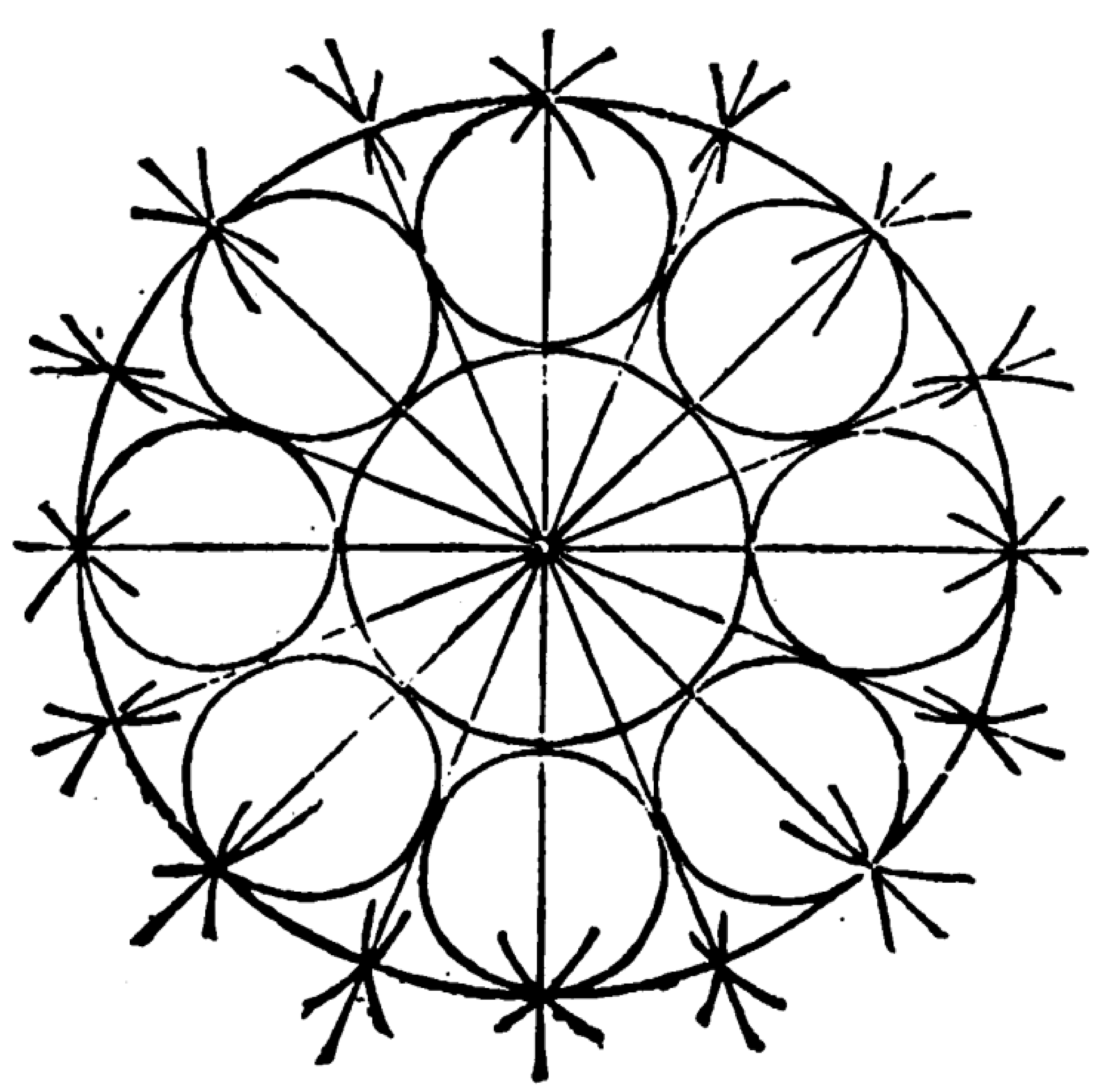
紋帳圖式綱目（八）

井上頼文寄贈

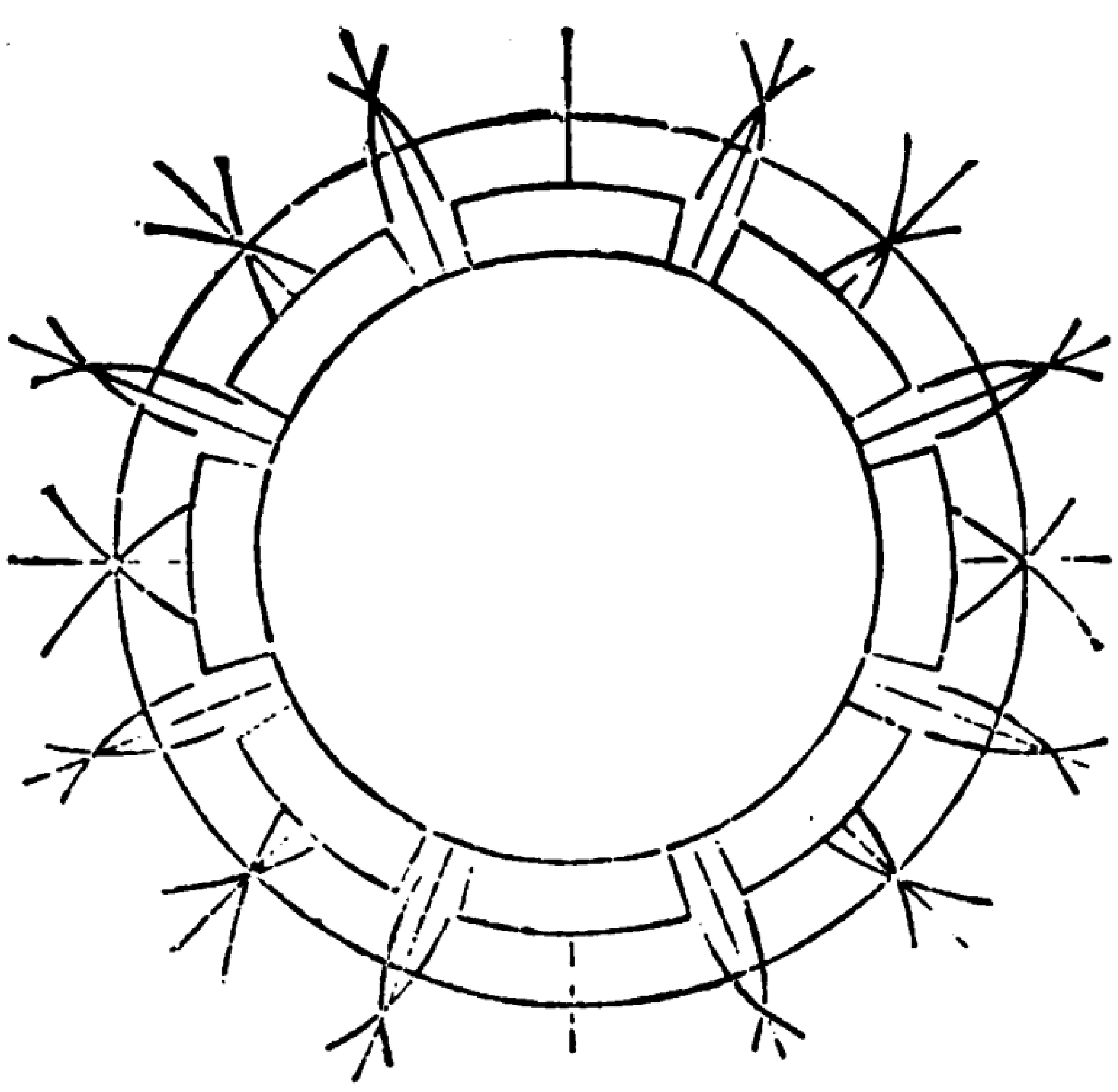
八ッ物但十六の割



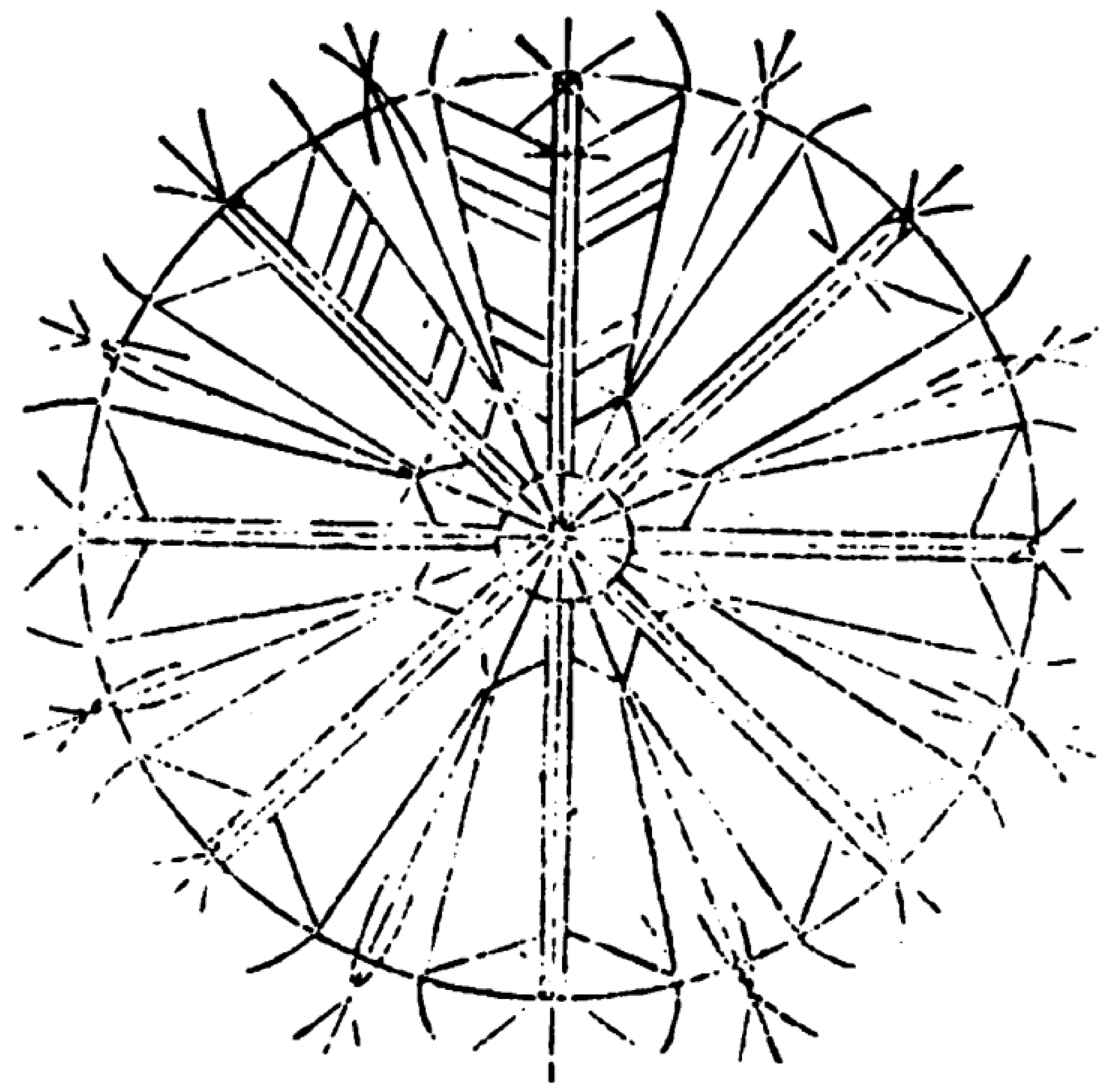
九よう



源氏輪

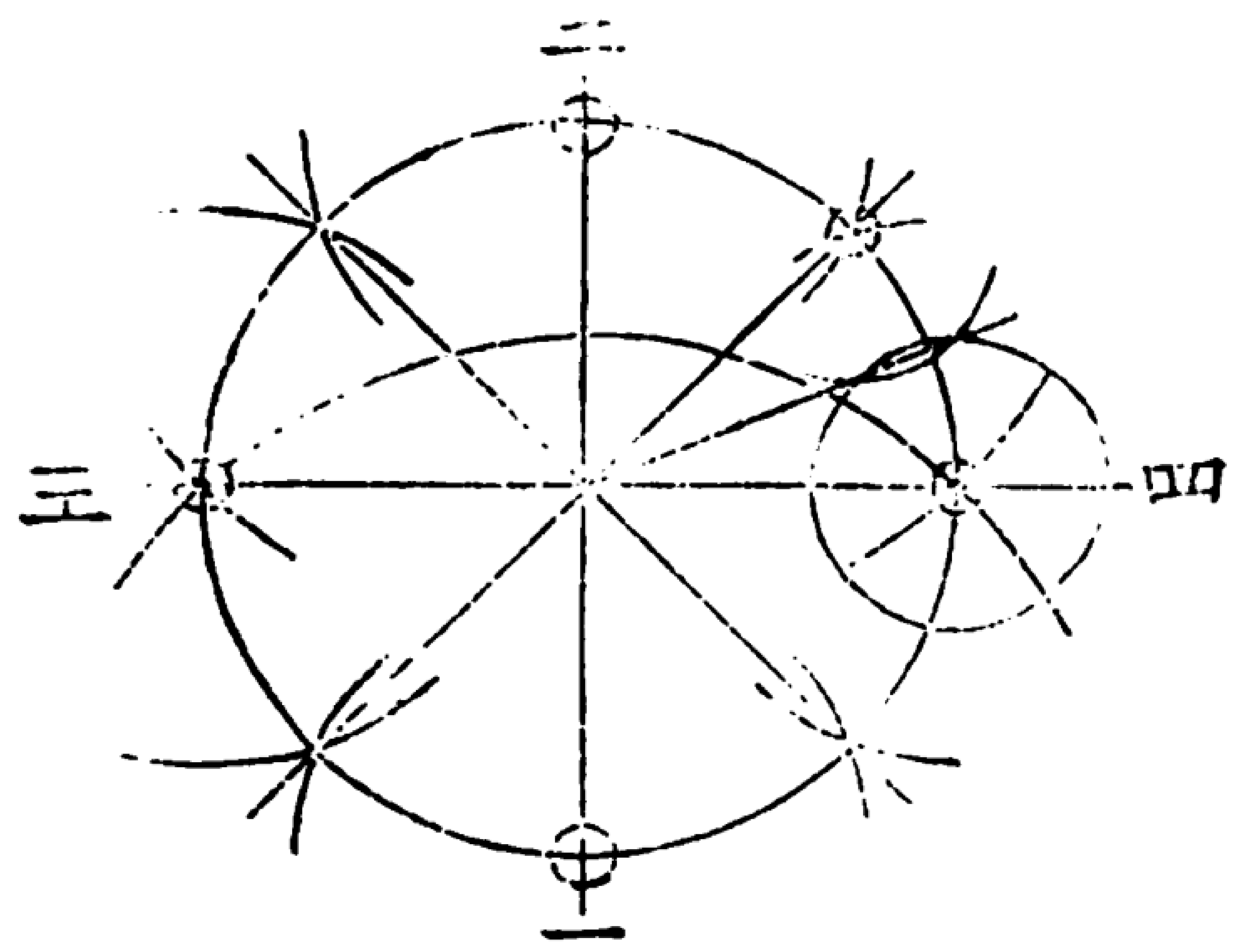


矢ぐるま



右にしるす割のごとし。但前に有る四つもの（八ツ割）のあひだを割るなり。兩方より╳かくかけるなり繪圖注とを能く引合すべし。

但割方如此



一二三四は針穴の番なり

わらひ草

火事の玉子

薫風仙史

いつの世のことゝもしらず、片田舍に住める歌よみの名人あり。これを聞きつたへて、歌よむことを教へたまへとて、よりくるもの多かりけり。その中の一人、問ひけるやうは、歌はいかによむべきといふを、歌よみの名人答へて、たやすきことなり、如何なることを詠みいでんにも、まづ心得あり、その心得だにさとりねなむ、世の中にあらゆるもの、よみねずといふことなしといふ、さらばその心得といふこと教へたまひてんやといへば、いとやすきことなり、まづよまんと思はゞ、大きなることを小さげにいひ、小さきことを大きやかにいふなり、これだに心にかけてよみ出なば、名歌もいとやすくよみねつ

べし、といふを弟子きゝて、よきことをきゝえつと思ひて、いでや一つよみて世の人をも驚かしてんとて、首をかたげ、心をくるしめて、何にもわれよまんと思へども、とみには心にもえ浮ばざりけり、かくて日數ふるほどに、ある夜月いとあかきに、とある山にのぼりて、これよきものなり、とて目もはなさず、うちながめて、世の人はみな月の歌を詠むなり、おのれも今宵こそはと思ひて、とかく思ひかまへつゝ、さきにをしへられし心得といふことにたがはずよまんと工夫して、からうじてくねりいだしたるは、

　地瘤から星の父をながむれど
　　火事の玉子はいらぬものなり

かくてこそ名歌なれ、いでまづ師のもとにいたりて、驚かしてんとて、家にもかへらずしてそこより直にいきけり、さて師のもとにいたりて、ほこりがほにこの歌をかきて出せるに、歌の名人いかによみたるかとて、くりかへし〳〵見れども、何の心ともきこえず、しばしよみによめどもわかず、さてこれはいかなる心にかと質すを、弟子さてこそわが名歌はさすが師の君にも解きかねたりと思ひて、したりがほにていふやう、さればなり、地瘤とは山なり。星の父とは月なり、火事の玉子とは、灯提のことなり、山に登りて、月のさしのぼれるを見れど、灯提などは不用のものなりといふ心なり、といふを名人なほ心得ぬおもゝちにて、さて心はきこえたり、されど地瘤星の父、火事の玉子などいふこと、おのれいまだきかぬことなり、地瘤を山といふこと何のものに見えたると問へど、さなり、物に見えたるにはあらずさきに大人の敎にて聞き覺えつるなり、大きなるこ

とを小さげにいへとのたまへど、かくはよめるなり、山は地の瘤にはあらずや、また星は小さけれど、子なり、月は大なれど父なり、月を星の父といふはてれなり、また灯提はまとかなるものにて、それに火ともすに、あやまてど、火事も生るゝことなり、されど灯提は火事の卵にはあらずや、かくてこそ大人が敎にもよくかなひて、いとよくよみてけりと、われながら思ふを、などてあやしみたまふといふに、歌の名人も腹をかゝへたりとなり。

東京二十四景（十二）

蓬生屋女史

日暮里

名もすゞしげなるひぐらしの里、上野よりは北の方に少し深く、道灌山根岸の里までにはひき入らずして、鳥の音、虫の聲もあはれにものしづかなる、げにふりはへて日もくらし、夜もあかさまほしき里、三島明神、清水稲荷、諏訪神社等何れも靜かに神さびたる神社にして、見る目おのづからぬかづかれて心さへ澄み亘るもいとたふとしや。俗に花見寺とよびなす昔の寺の跡、その名に負ひて、櫻、躑躅など殊に多く、彌生より皐月にかけて、錦をさらせるかと見ゆるに、あやしげなる岩石の彼方此方にそびゑたる、深山幽谷に入りし心地もせられて、加藤清正の手とか云ふ大なる手形の刻まれたる石碑のたてるなどいとをかし。

道灌山と一崖を隔てたる丘の上に、太田道灌のいとなみけむ繫舟菴の石碑も殘り、馬琴の筆塚も殘りてそゞろに古をおもひやらる。諏訪臺の眺望いとよしみどりなす空の上に、筑羽根の遠く見亘され、見下

す麓に、三河島、上下尾久、三谷などの村々つらなりて、田や、森や、相點綴せる口を、一條の荒川迂回してながるゝに、白帆のうかぶもげにうき立つ心地す。かすみこめたるあけぼの、秋霧たなびく夕べ、雪のあした、みどりこき空、まして賤の男たちがすきかへす頃より、すげ笠ならべて早苗ひく頃は云ふも更なり、夏のいぶせき夜、賤が軒も涼しき風、亂螢を送り、霜枯の田にひとり殘されたる案山子に、雪の白くつもりたるもいみじう哀れにて、四時あきたらぬ眺めなり。



たゞ一つ涙の種ともなるは、火葬場の烟突の立てることにして、兼好法師があだしの丶露、鳥部山の烟とつゞけむ古の恨もおもひやられ、世のはかなさに身のおき處なきこゝちして、袖のしめりがちなるもわりなしや。

此の里もとは新堀と書きて、につぽりと訓みしが、のち、日暮里にかき改めて、音をそのまゝ、につぽり村と呼ぶ。こをひぐらしの里といふは、假りに雅びやかに訓みたるにて、土地の人には通せぬぞかし。

朝露（つゞき）

柳子
櫻子

（廿六）

芳野武雄は、未來永遠なる企望を以て、日々勉强せし甲斐ありてゝ、海軍豫備校もことなく卒業して。このたびの兵學校の試驗には、天晴及第してんと思ふ心にはげまされて、夜の明くるをまちては書見する外餘念もなし。

一日信夫ともろともに打つれ立ちて、大川端の水泳場にて遊泳して歸りしが、其の翌日は、例の如く起きもせで食事もせざれぞ、一家のおどろき一方ならず、見れは武雄は愀然として蒲團の上におき上がり、腕を拱て何事をか考ふるが如し。

道子「武雄さんよつほどおわるう御座いますか、大木（醫師の名）さんでも呼びませうか、なんかすきなものをおつしやい、こしらへて上げますから。武雄「ハイ僕はもう何も喰ひたくありません。「こまりますねへ、大木さんをよびましやうか。「イエよう御座います。「わるくなるといけませんよ。アゝなにかおすきなアイスクリームでも一口たべて御覧なさい。「僕はたべた

いときにいひましよう。「さうですか、それではなんでも御ゑんりよなく。おつしやいよ、ね、武ちやん。「エヽどうも…………

信夫はおのが親友の病氣の事とて、大に心配して、おもしろき事。をかしき事などいろ／＼に語り慰むれども沈み勝なる武雄の顔は、ます／＼沈み行く許りにて。翌日午後三時頃に至りしに。熱や出けん、顔のいろ赤く、呼吸も苦しげに見えしかど、醫師をよびて診察せしめしに、こは、すぎにし日、水練に行きし折、ジフテリヤのバチルスの水分に交りてありしを呑みしならんといふに、まづ打驚かれて、いろぎ忠高にも、相談して、都下に有名なる何某病院に入院せしめて、ひたすら全癒を祈る外なく、されど急ぎて母の方へも電報もて通知し、至急上京さるゝやう、いひれくりしかど、母清子は大におどろき、愛子を下女と共に、心利きたる知り人の許に托し置きて上京し、病院に至れど、武雄は。余程重病とみえて息づかひも苦しげに、母の來れるをみて、心に嬉しとおもひしか、につこと半ど笑ひしのみ、何事をか云んとおもふ樣なれど、咽喉の病とて、思ふやうに聲も出でず、只苦しげにうめくのみ。こをきかど、他人にても、憐れといふ事を知る人は、一滴の泪をこぼさゞるはなかるべし、ましてや此は血をわけし實の子、しかも父の名跡つがしめて、天晴軍人となして老樂にこの世をおくらんとおもひし其親愛なる我子のくるしむをみたりし母の心の中、思ひやるだにあはれなり。母は氣をつようして、泣かじとすれど、胸ふさがりて、言葉も出です、胸はのみもてさゝるゝ如く、たゞ泪のみわき出でゝ、伏したる武雄の姿も

おぼろ〳〵とみえがたうなり行きぬ、ちからなげになみだをぬぐひつゝ

清子「武雄や。母がきましたよ。豫備校をりつぱに卒業した時の嬉しさ、實に〳〵いひやうもありませんでした、マアどうして……こんな病氣にかゝつたんでしやう……しかしそんなに重くはありません、早く治つて、おとゝ樣の御家を立派についだなら、どんなにおよろこびになるでしやう、のう武雄、はやくなほつておくれよ。

といへど耳にきこえしか、只うなづくあはれさ。折しも院長來りて注射をなし、歸らんとするとき、清子は袖をひかへて病狀をとへど、さも氣の毒げなる有樣にて、今すこしはやく入院せしめ給ひしなれど、十分治療の見込もありしものを、今ははや日數もへて手おくれとなりし事とて、且はまれなる激烈なる性なれど、とても全快の望は覺束なく、治療のみこみもなしと覺ゆるなり。失禮といひすてゝかなたに出て去りぬ。あとに清子は茫然と我を忘れて立ちゐたりしが、かくてあるべきにあらねど、けふより我かはりて看病せんといひて、松井家の人を無理に歸らしめて、おのれひとり病牀に打添ひて、ねむりもやらで武雄のかほを打守りゐたり。折しも又もむなぐるしげにうめく聲のきこゆれど如何にと見るにめはとぢて、やはりいねしまゝなり。

病院はいと廣く、窓の外は廣やかなる庭もてめぐらし、燈火はひとりあかるく全室を照らし、角にあるものまで明瞭に判別し得べけれど、四邊いとさびしくして聲もなく、只病人のうめく聲、時計の針の一刻一刻と時をきざめる音のみ、もの淋しげにきこゆなり。月はさやかに中空高く登りて、ときみかける鏡

に水のしたゝるが如く、硝子まどに松の木かげをうつせるさま、いとゞあはれに物思はしう、いよゝ憂をますばかりなり。折しも何にかおどろきけん、水とりのはたゝきして立つ音淋しく。羽風に散る木々の木の葉、窓をかすめて、ちり行くとり〴〵あはれに、無常の觀念をふかゝらしむ。清子は低聲に獨りごちて

「アゝ武雄や。かうならうとは思ひがけざりし。東京へ出て修業させ、兵學校にいれて軍人にしたて、父上の御名跡をつがせ、家を立てゝ、御國の爲にと實に片時も忘るゝひまもなかりしよ。いかなる因果が、おのずと病氣の發したるにあらで、人の病をうくるとは、實になさけなし。妾よく〳〵の不仕合よ、いかなれば可愛の我が子をむざ〳〵としなされるならん。御遺書にも、武雄をはやく成人さして、わがあとをつがせよとありしものを、思へば〳〵悲しき事ばかり。まださきも揃はぬ若木の花をあたらあらしに散らすとは。妾程の不仕合のものまたとあらんや。柱とたのむ背の君にははやくおわかれ申して、杖ともたのむ我子にもやがて別かれねばならぬ……アゝいつそこの世の中に生れてこずば、アゝ………と、ふと息つきて病人のかたをみれば、おほへるきぬの只白く見えて、みなぎり落る憤水の水もねむりて音しづかに、竹の葉の風にそよぐ音淋し。(未完)

朴平（十）

白魚女史

めづらしい、文雄君か、これはめづらしや、まづ上り玉へ、此の頃は紅葉もよしとの事、いつか誘ひてと思ひ居りし處、幸小春の日和、今日は殊にの

かなり、まづ上り玉へ、瀧の川にでも同道せむ。さるにても先日は大失禮せしよと、春野が例の快活の句調。文雄、今日は流石にいつぞやの狼籍、ふびんものと思ひて來りしを、彼方に先きをこされて、今更に言葉も出でざりけり。いざ／＼文雄君、上りね／＼とて、頻りにうれしげにて誘ふまゝ、文雄も隔てなき中、遠慮なくつゞきて通り、春野が直す火鉢の邊りに坐りて、巻煙草取り出しながら、いつぞやは大失敬、實は思ひ出されて面目なさに、今日はあらためてわびにと思ひて來りしことよ、容したまへとさすがにまじめなるけしき。

こまる／＼、折角長閑なる天氣、さうむづかしくされてはこまる／＼、天氣やめ玉へ。去かし、われは僕がわるかりしなりしよ。文雄君の前故、文を出しれけむよかりしものをとて、興風のから／＼とうち笑ふに、さりても父御が秘藏されし花瓶、われながら、うちわりしはあまりの心なさ、誠に亂暴の仕業、君は兎もあれ父君にすまぬと、ますます重くまじめなる文雄の言葉を、むざ／＼と泡まてかる／＼うち消す春野。なに、あれは父の大龍臣、父のあとを追ひ行くことが出來て、心あらぞ本望といふ所ならむ。僕もあれの終りしにて、かく、目にさわるものなゝなりて、心も思ひ出でもなくなりて、氣が晴れやかになりし事よ。さりても文雄君、折角僕の家に來給ひしを、誘ひ出すもをしけれど、山姫の錦きて見ぬも心なからむ。高等中學の折りにきて見しのみとや、さてはいとふるびたり、新しうきて見るもをかしからむ、今より瀧の川へ伴れ立たむ。如何にぞ。行き給ふとか。それは嬉し。さらむすく此まゝ、いやすこし待てよ、あまりに羽織きたなしと云ひさま、ね

きすて丶、何やら黒紋の羽織ひきかけながら、文雄君、何とか云ひしね、あの翁ちよんまげは變ることもなきかと問はれて、心付く此の間のみやげ、知りたる中、面倒と禮も云はず。われも此頃はいやましに老ひぼれて、わからぬ事をするのと、涙もろくなりしとには困るよと答ふるほどに、輿風はや羽織の紐も結び終りて、伴れ立ちて玄關に出で、下女がなほす駒下駄つきかけながら、風も出でなむ。つる、山の神に嶄わげてれけ、文雄君の早速の承知にては、天媛樣もあやしけれども戯むるゝに、あな山の神なぞとて、荒神さまですよと、下女のとがむるもれかし。

何やらん二人は話しつ丶、笑ひつして、やがて瀧の川近くなりしに、伊能君、むかしにかはるざつ風景など云ひて怒り給ふな。花瓶もなければ、人などなげるはよし給へ。今日は呉〱も不平云はぬ事よと、春野が斷はるも道理、岸のさま、道のほとり、むかしには似ず床かしげなる小草も刈り取られ、寄りたくもなきかけ茶屋の軒を連らねて、およりあそばせ、れかけ遊ばせなど、つくり聲して呼びとゝむるさまに。いかん〱不作法なる奴どもが、あたら所をとゝはやもらす文雄の不平聲、それは云はぬ約束なるを、罰には何をれでるなど戯れつゝ、たどりつけど、紅葉の色はありしむかしに露異ならず、今を盛りに濃く、薄く、錦をれりなし、ながるゝ水のからくれなゐ、げに神代もきかずなど興に入りて、車をとゞめてなどと輿風の吟じ出るに。きたなし春野君、あたら詩、かゝる所によみ給ふな、詩が汚れるは、楓林にはあらず、俗人の林なり。もう歸らんではなきかと、またしてもこらへぬ文雄の不平。さはいへ仕丁

にも風流男がありしものを、人は見かけによらぬものをと、與風はなほ文雄の袖を取りて、彼方此方紅葉の下を引きありく彼方より、四五人うちつれだちて來りたる藝妓、藝子、文雄を見るより、何故か二人三人、年とりたるは人に紛れてかくれ失せぬ。あな愛らしき娘やと、人のふりかへるとたん、やは、小千代の子よ、紅葉見にかと與風の聲かくるに、文雄何でゝろなくふりかへれど、さきつ日の藝子、小千代とよびたる、文雄が散らしたる花の一片、ふびんのぬれ衣やとてひろひたる小千代。

小千代の子、諸共に來らずやと重ねて聲かくる與風に、靜かに會釋して、ありがたけれどつれの侍れどとて、玄とやかに答へして、文雄の方をうち見たるが、何故かさつと紅葉を顏に散らして行き過ぎぬ。商買にも似ぬやぼの子やと、與風はつぶやきながら、折るべからずと云ふ岸の紅葉、折れぬものかはと云ひつゝ、一枝手折りて、かたにかけ、我ながら少年のやうなるかなとてうち笑ひ、少年といへど思ひ出るよ、のう君、伊能知君、行軍歸りに、此處に紅葉を燒きて吸みしこと。嗚呼忘れたり〳〵、口惜しきことせしよ、瓢を忘れては來たり、君があまりに珍らしく早速承知したるものから。早く何處へか上りて飲まんではなきかと云ふに、何事をか考へをりし文雄は、大さんせい、早く人林は立ち去るべしと云ふに、二人うち笑ひながら、もとの方に引きかへし。やがて海老屋へと上り、二階より見下しながら、やや小千代の子が彼處を通るよと云ひながら、與風手をうちならすに、はいと此の屋の女の答ふるもをかし。あな氣もつかず行き過ぎしよ。商買にうとき子よ、うときも道理、あれはにごり江に置くはをしき





子、親なく兄弟なく、ひきとりし伯母のわろくてと
いつか涙を流して語りしがとひとりつぶやく折りか
ら酒肴、まづ一杯とつぎ初めぬ。

文林



冬川　　近衛忠熙

冬がはのこほらぬ水もこほるかと
おもふばかりに澄わたりつゝ

冬日　　東久世通禧

わたゝけきみなみの軒の日の影に
背びらさらさん冬はきにけり

寒夜衾　　毛利元徳

いかにしてうまいはせなしわつ衾
重ねてもなほさゆるしも夜を

初雪　　高崎正風

はつかにもちりのこりたる紅葉の
こずゑにかゝるみねのはつ雪

森時雨　　長谷信篤

村しぐれすぐれどもまたもゆく雲の
うき田の杜ぞみえかくれする

庭落葉　　前田利嗣

暮ぬまにとふひともがな我にはも
けふは紅葉のにしきたきたり

枯野霜　本多忠貫

朝日かげさしわたれどもすゝき原
とけんともせぬ霜のいろかな

氷初結　西三條實義

けさの朝げこほりそめけん山里の
軒のかけひのおとのたえたる

社頭時雨　宮地巖夫

幾たびか時雨はふれどひろまへの
さかきの色はかはらざりけり

朝水鳥　北郷久政

朝づく夜かげものこれる池みづの
こほりの上にをしのねぶれる

籬菊　遠山英一

きくの花あまりてたつる朝つゆに
香さへあふるゝませの内かな

をりにふれたる　三浦千春

朝ごとに同じかゞみにむかへども
きのふの影はうつらざりけり

和田正雅君より柿といちしくをたくられけれ
はたはふれに　大畑弘國

あぢきなくよをうみわたる我袖に
うれしさあまる秋のたまもの

かきの實のあかき心を折りろへし
言葉のつゆもいちじるくして

阿部岐伊女　佐々豐水

長月のつゆときえてもひもがたな
さびぬこゝろのはしら高しも

菊蒲池塘　藤井行麿

ところがらあなすが〳〵し神路山
御池をかこむきしのしらぎく

庭紅葉　三輪義方
み山のにくらべてみれど薄けれど
こゝろの染まる庭のもみぢぞ

名所紅葉　柴田靜榮
をとめごが袖ふる山のはつもみぢ
誰にこかれていろにいでけん

秋旅　和田正雅
ふるさとにかへる錦のゆめや見む
千草はなさくくさまくらして

樵夫歸月　宇井正夫
打ちつれてうたふも淋し道すがら
月ふみかへる木曾のやまみち

螢帶露　石原均

花ずりのころもの袖につゝみ行む
よはひのぶてふきくのした露

神功皇后　本庭芳香
ますらをにまさりてたけき御心に
虎ふす野べをふみしだきけん

草花　安齋篤敬
千草さく秋のはな野のからにしき
おりかへぞやな妹がたもとに

竹霰　近衛貞子
やどりたる雀やいかにおどろかん
あられたばしる庭のたかむら

夜落葉　鍋島榮子
木枯のかぜにまじりて夜もすがら
さわぐ落葉のおとぞきこゆる

山家落葉　前田朗子

やま里の淋しさいとゞまさりけり
散もみち葉のれとむかりして

翠松　柳原愛子

君が代の千世もこもりて見ゆる哉
こまつがはらの深きみどりに

行路霜　小池道子

てる月のかげふむ道のさむきかな
また宵ながらしもやれくらん

社頭冬月　松平健子

秋見てし杜のこずゑはしもがれて
とりゐさびしくすめる月かな

籬殘菊　日野西廣子

わかれにしあきや籬にのこりけん
またさかりなる白ぎくのはな

月前時雨　三宅龍子

紅葉のかげにてしむしやすらはん
つきはさしながら時雨降さぬ

山影映水　鶴久子

谷がはの水のながれははやけれど
うごかぬ山のかげは見えつゝ

冬鳥　中島歌子

霜しろきをかの枯木にみつふたつ
なくこゑ寒きわさがらすかな

秋風寒　遠山いね子

秋風は夜さむになりぬわがせこが
ころもいまだ繕ろはぬまに

河上落葉　諏訪晴子

水鳥のすがたは見ゑぬかもがはに
うかぶはきしの紅葉なりけり

社頭梅（天滿宮奉納）　安東菊子

御心もつくしにまつるかみがきの
梅は千とせのかをりなりけり

瀛車　　内田ゆか子

岩もさけ山もうごかんと思ふまで
音もろともにゆくくるまかな

旅行友　　清水静子

故さとをあとにはる〴〵行く旅は
夜な〳〵月をともとのみして



雑報

●新嘗祭、鎮魂祭　去月廿二日には宮中にて、鎮魂祭の御事あり、廿三日には、新嘗祭、御親祭あらせ給へり。

●御歌會始勅題　來ん明治三十年御歌會始の御題は、「松影映水」とおふせ出させ給へり。詠進の期限は、明年一月十日までなりと。

書式

名上
松影映水
…………
…………

五つ折
堅詠草
用紙は檀紙、奉書、杉原紙、又は美濃紙、
裏面に住所、族籍(官位勲功爵)姓名を記載すべし。

因に云、年々御歌會始めに、一般臣民より詠進する詠草は、總て各府縣郡別に、御歌所にて、製本の上畏くも其儘にて　天覽に供し奉るものなれど、書式等嚴肅に認むべきは勿論の事なれども、往々誤解して、亂雜なる詠草を奉るもの尠からず、かゝる違式の分は、止むなく御歌所にて、悉く書き改めらるゝにて、自然御會日の間に合はざる趣なれど、詠進し奉らんとならむ、深くこゝろすべき事なりかし。

●宮中御歌會　去月五日宮中にて催されたる御歌會御兼題の御進詠は

金鵄勳章

みいくさにたてし勳のしるしこそ　高崎正風
やがても國のひかりなりけれ

くにのためいのちをしまぬ武士の　津輕承昭
いさをはしるし鵄のしるしに

たくひなきいさをゝたてし武士の　大谷光尊
黄金のしるしよにそかゝやく

こかねもてつくれる鵄はとつ國に　水野忠敬
かちしいさをのしるしなり鳧

武士のむねにかけたるしるしにて　清岡長延
くにに盡しゝいさをゝそしる

つるぎたちよにぬけいてし武士の　町尻量弘
いさをは胸にかゞやきにけり

比なきいさをのしるし身にそへて　柳原愛子
つかふる道にすゝむますらを

皇國のひかりもそひていくさひと　千種任子
黄金のしるし身をてらすなり

軍ひとかけしこかねのとひのはは　小倉文子
みくにを照すひかりなりけり

いくさひとたてし勳のしるしこそ　園祥子

黄金にまさるひかりなりけれ

軍びといさをのしるし胸にかけて　樹下範子
君かみいつをあふぐみよかな

こかねにもまさる寶はいくさびと　姉小路良子
たてし勳のしるしなりけり

軍びとたてしいさをのいちしるく　税所敦子
かゝやくみよにあひにける哉

身をすてゝたてしいさをも軍ひと　小池道子
かくるしるしに現はれにけり

たかくとふとりのしるしは軍びと　北島いと子
黄金にまさるたからなりけり

ためしなきればみ軍もをさまりて　平田三枝
いさをのしるし仰くみよかな

みに添る鵄のしるしは身をすてゝ　黑川眞賴
たてしいさをのひかりなり鳧

そのいさを高くあかりししるし社　坂正臣
黄金のとびにあらはれにけれ

もろこしの空にかけりし益らをの　小出粲
いさをは鵄にあらはれにけり

武士のいさをます〳〵かゝやくは　植松有經
黄金のとびのひかりなりけり

胸もせにかけし中にもまはゆきは　大口鯛二
黄金のとびのしるしなりけり

輝けるとびのしるしにみゆるかな　鎌田正夫
たかくのぼりし國のくらゐも

よに高きいさをそみゆるいくさ人　千葉胤明
胸にかゝやくとびのしるしに

こかねもてつくれるとびは軍ひと　遠山英一
いのちにかへしたからなる闕

●冷泉家の古今傳授　古今傳授といふもの、歌道

に遊ぶものはいふ迄もなく、細川幽齋の田邊籠城より、殊に雅俗間に知れ渡りたる歌道の名譽にして、基俊、俊賴の二卿の傳授を俊成卿に、俊成卿より定家卿、其子爲家卿に相承あり、爲家卿に二子あり、長子を爲氏卿といひて、二條家の祖にして、其家の傳承を二條傳といひ、幽齋法印等の受けたるものなるが、此家は中絶して今は飛鳥井家にて、其祀を繼がるゝ由、次を爲相卿といひて、其傳承を冷泉傳と稱し、嫡々相承して、いま二十代目の爲紀伯に及びたるが、此傳授は其家にありても、院宣若くは勅許にあらざれど、其秘卷を披くこと能はざるものにして、爲紀伯には曩に上願ありて、今回 勅許の御沙汰を蒙り、本月十八日、京都の自邸にて、古今傳授を行はれたり。其式洵に鄭重なるものにして、三日間致齋せられ、當日和歌の祖神を祀りて、後に傳授の卷を披見あり、次に家祖を祀りて、奉告祭を行ひ、終りて、高辻、醒井、角野新住吉神社。松原、烏丸、西の新玉津島神社。佛光寺、堀川、菅大神内の人丸神社に參詣して、賽しをなし、其式を畢りたりと。此三社は皆定家の卿の觀請あるに依りての故なりとかや。然るに歌道に女の披口といふもの、正中二年にて斷絶してありしを、爲紀伯が遺憾に思ひ、幸ひ其家に相承あれど、去月廿二日を以て、婦人の披口再興の式をも擧げたりと云ふ。

●姑婦の雙烈　母を奉じ、家を擧げて、渡臺の途に上り、神戸にて、船待せし、乃木將軍の許に、高島拓相より「臺北黑死病多し邦人十七名亦た病に罹る渡臺見合はせよ」云々との電報飛來したるに、將軍一讀、筆を呵して「刻下臺灣急施を要する事多し小官の渡臺一日を緩うすべからず黑死病あらんか小官單

身赴任すべきのみ厚意多謝するに餘あり」との返電を送りつ。去れど母堂を悪疫流行地に伴ふは、孝道の許さゞる所如何ともして、母堂を京地に還さむやと詳かに此由を物語りて、偖暫し御渡航の程思止まらせ給はんやと請はれつるに、母堂首を打振り、辭を正しくして、身は辱なくも天顏に咫尺し奉りたる榮さへあるに、今更ら悪疫ありとて、引還さんや、死は一のみ、益なき事に心遣ひし給ふなとて、霜かとまがふ白髮の、ソヨとだに心動せず、令夫人亦た、傍に在りて、善しや上陸を許されずとも、せめて長崎までは伴ひ給へ、其所にて病毒衰ふる、日を待ち侍らんとて、決心飜へし難くて、遂に同行に決したる由なるが、聞くだに感涙に堪へぬ姑婦の雙烈聯芳、誠に是れ婦女子の鑑、南溟の蛟鰐も遁竄するなるべしかし。

●外國への修學旅行の嚆矢　女にかゝはれるくとならねども、めでたきことなれば記す。長崎の商業學校の生徒は、さきごろ上海へ修學のために旅行したるが、かの地に住める、我國人は更なり、歐米の人までも、この企いと壯なりとて、いたくよろこびてむかへ、かつなにくれともてなしけりといふ。さて去月九日といふに歸港せりといふ。これは我が國の學校生徒の外國への修學旅行のはじめなり。

●古事類苑　は神宮支廳にて、編纂するものなるが、その三十六部門の初部なる帝王部は、ことし春のころ脱稿して、印刷にかゝれりしよしなりしが、このはたまくど成れり。かゝる企はいとうれしきことにて、なほつぎ〳〵のも、さはりなく、速に成り出んことこそねがはしけれ。

●おそろしき中毒　北むきの河豚は必ずわたると

て、漁師もみだりには食はぬを、このごろ東京にてこれを食ひて、たちまち中毒して、命をおとしゝ人二人ありしときゝぬ、おそろしきものなれど、みだりには食はぬがよかるべし。

●わが國の語を學ぶ　むかしものがたりに、豊臣秀吉公征韓の際に、外國の語を學せんといふ人ありしに、えうなきことなり、彼の國の人をして、我が國の語を學ばしむるばかりの勢ならではといひしといふことあり。げにさることなり、しかるに、先つ年の征清のことありてよりは、わが國の光も世界にかゞやきわたりて、世界の各國みないみじき國よと舌を卷くが中に、ロシアといふ國はことに膽を冷してかの戰よりこのかたは、我が國をあしらふさまも、打ちかはれりときくに、げにさなりと覺ゆることあり。このほどさる人のものがたりに、近きころ東京あるは横濱、神戸をはじめて、我が國にある露國の將校武官は、いひあはせたるが如く、いづれも一時に我が國の語を學ぶに餘念もなしといふ。心のそこは知るべからねども、心地よきことなり。

◎女鑑歌文兼題　ことしもはや十二月になりて、やがて暮れていなんとす。一月より今になるまで、歌文兼題によりて、出詠せらるゝが、日に增し月におほくなりて、いとも盛りになれり、かばかりわか國風のさかりになりゆくこと、國家のうへよりしても、いともうれしきかぎりなり。なほこん年はいやましにまして、さかりになりゆかんことこそねがはしけれ。何事もなく、すら〳〵と詠みいでんきは、しどらくいはず。なにごとにもあれ、はじめより上手なることはかたし。聞ねかたからんには、よきやうに添削もしつべければまづはじめはいかにもあれ

詠みいづべきなり。今日は明日はと思ふばかりにて過ぐしなど、つひに一生の間よみえがたかるべし。さて又來ん一月五日のは、ことし十二月二十日までには、必よみれこしてよ。

●附錄　こたびは、明治三十年分の女鑑歌文兼題のすりものとを添へたり。

●末松文學博士の講話

婦人の務（つゞき）

又其多過ぎるといふことは、主として社會へ出て交際する上、其他の事を幾らか考へたから起つたのでありませうけれ共、學校の教育が、餘り此等の事に身が入り過ぎて、其方ばかり教へると、心が浮々として落着かぬ、斯樣の事柄が多過ぎるから、シツカりした魂を拵へる道がどうも乏しいと云ふ事が重もに置いてあります、此點抔は、我邦の女子教育に付ても餘程參考になる事ゝと思ふのであります、世間で、琴、三味線の樣なものを矢鱈に教へ込む樣にして行くに付ては、概ね極まつた目的の無いのみならず、下等社會では、却て餘り學ぶべからざる目的に出るものも多いやうですが、上等の士女達に於きましても、若し夫れ等の事に耽り、唯、所謂藝といふ方の事ばかりに心を取られる樣なる風になりましては、ウカ〳〵する中に學校は退かなくてはならぬ時が來る、習つたものは與から覺えもしない中に、直きに婚禮でもすれば、それ切り廢して仕舞ふといふ樣になり實用をなさず、夫れも一つか二つなら宜いが、種々なるものを注ぎ込んで、何一つ是ぞと云ふものに上達せずに終るものが多いやうです、諸藝の仕込、固より其物が惡いと申すではないが、之れにのみ氣を取られ、却て大事の事を後にするやうで

は前申すやうに浮華の飾りを來します。

さてさうして見ますると、何を眼目とすべきかと言ひますると、どうしても婦人の敎育に於きましてもいやに下手の漢語抔を使ひ、其他物知り顔に生意氣を働くやうなことになりてはいけませんけれども、左樣な風に馳せずして、一片肝膽に感じては、是非とも守つて行かなくてはならぬと云ふ高尙の思想があります、其思想を注ぎ込むことが餘程大事である其事物は、直ちに之を文字に直して見ますれど、則ち茲に此講堂にも揭げてある所の忠孝、猶引延べて云へど、忠義節義といふ樣なる文字を以て言ひ顯はしすの外は無い、即ち心の端然たること、國家に對しては忠を盡し、父母、兄弟、夫に對しては孝を盡し、悌を盡し、節義を盡すといふ一片の確乎たる心の塊りである、勿論是は其塲合〳〵に依つて、名の附け方も色々ありますけれ共、要するに、忠孝節義といふ樣なる文字を以て顯はして宜しいのである、其心といふものを自分の胸に深く印刷して注ぎ込むといふことが大切である、是からして愛國心抔といふものをも生じて來るのである。

さて又チヨット左樣に申しまするど云ふと、日本の女子は、或部分に於てはさう云ふことの役に立たない樣に思はれる事もあるのである、婦人が愛國の事を談ずるは、餘り餘計なことでは無いかとか、夫れよりも家を修めることを早く習はねばならぬと云ふ樣な說もあり、是も一議論であります、勿論婦人は男子よりも世に處し家を修める道を早く知らねばならぬ必要があるのである男子の方で見ますると、學校に行く年も長い、又學校から退いても學術を修める暇が隨分あるのである。

（未完）



教の庭

十二月五日兼題　冬月

天

秋見てしひかりもたなし影なから
　しもにふけゆく月そさむけき

信濃國上伊奈郡赤穂村　小町谷里江子

地

はりつめしいけの氷にかけとめて
　見るも寒けきふゆの夜のつき

淺草區小島町五十七番地　大谷津琴子

人

賤か家の軒のつらゝにかけ冴えて
　いとゝさむけきふゆの夜の月

奈良縣奈良町大字北室　森永己巳子

秀逸（十五首）

狐なくこゑもたえてしもさゆる
　かれのゝ原のつきのさむけさ　仁井田富子

冬かれのかきねの霜にかけさえて
　ものすこきまて見ゆる月かな　平山房子

落葉しくむくらか宿にしもさえて
　さむけさまさる冬の夜のつき　日高かず子

ふきはらふ松のあらしに雲はれて
　たもとにこほる冬の夜のつき　筑紫枝子

風はやみさわくしくれの雲間より
　もるかけすこしふゆのよの月　近藤はる子

ますかゝみうかふとみしは池水に
　やとりて凍る月にそありける　徳永萬壽子

霜こほる落葉かうへをよもすから
　すさましけにもてらす月かな　萩園露子

曇るかとみれはしくれの雲はれて
　かけ定めなきふゆのよのつき　藤林ます子

おく霜とまかふはかりに影さえて
　身にしみわたるふゆの夜の月　木村みつ子

池の面にうかへる月のしつけきは
　水とゝもにやうちこほりけむ　水津すけ子

霜のはなさきこほれたる庭の面は
　やとれる月のかけもさむけし　田代艶子

木枯にさはるくもをはらはせて
　かけさえわたるふゆの夜の月　香川頴子

夜をさむみおく霜しろき庭の面の
　落葉かうへにこほるつきかけ　橋口操子

みし秋のちくさはかれておく霜の
　はなのみてらすにはの月かな　下元もと子

浮き雲はおとなくはれてふく風も
　こほるはかりの冬のよのつき　後藤信子

（以下原稿到着順）

さくら炭かきおこしたる窓の戸に
　こほりてにほふふゆのよの月　佐々有郷子

むさし野の千草かれふす霜の上に　甲斐莊優子
　すこくもてらすふゆのよの月

風さえて霜にみかけるつきのよは
　たもとも凍るこゝちこそすれ　仁保基子

山里はわきてさむさのみにしみて
　かけさへこほる冬の夜のつき　冬木わか子

冬の夜はいとゝ寒さのまさるなり
　つきもてあそぶ友しなければ　冬木米子

照りかはすもみちはちりて山松の
　こすゑの霜にさゆるつきかけ　永井さい子

ぬは玉の闇と見るまはわつかにて
　ひときは寒くのほるつきかな　星野かず子

木からしの吹きさらしたる海原は
　秋にもまさるつきのさやけさ　星野ひと子

寒くとも窓ひき明けてしはし見む
　ちりしやなきの月のさやけさ　星野康世子

今よりは木の葉にくもる事たえて
　寒けさまさるふゆの夜のつき　品川はる子

おもふ事しはてぬほとに冬の日の
　くれてさむけくさゆる月かな　土肥仙子

こからしの吹きからしたる梢より　三浦とき子

影さへやせて見ゆるつきかな

ふゆ寒みふく木枯のれとさゑて　卜藏義江子
こほるばかりのつきのかけ哉

秋はなは木の間かくれのにはの面　卜蔵時代子
くまなく照すふゆの夜のつき

木がくれのやとにも月の影みゆる　小山勢幾子
冬がれときとなりにけるかな

ゆふつきの山の端に入る影見れは　淺見　孝子
淋しきふゆと成りにけるかな

谷川のなかる丶みつにさやけくも　淺見みつ子
くだけてうつる冬の夜のつき

さよふけて訪ひくる人もなき宿に　浦島　䋝子
哀れもれくるふゆのよのつき

床のしもそてのこほりも結ひ合て　中島　房子
こよひは寒きにはのつきかけ

ちりはてし落葉のうへにれく霜に　水島　良子
てるかけ寒きふゆのよのつき

みわくれは秋に變らぬつきなれと　楠　精子
かけいと寒きふゆのよのつき

木枯のもりのこすゑにかけさむく　野田千代子

小よふけてかさねてむすふ白妙の　溝口　佳子
今宵もてらすふゆのよのつき

かれのこる芝生に白きしもみゑて　西村登羅子
しものそてかき月さゆるなり

冬かれの庭のれちはもたまさかに　溝口　信子
そらに冴ゑゆく冬のよのつき

くまもなく嶺の紅葉はちりはて丶　神田　樂子
のこるこすゑにつきの寒けさ

かけやとすかはも氷にとちられて　木村　兼子
光りさゑゆくふゆのよのつき

よもすから塵なき空に木からしの　神田　春子
流れもれそきふゆのよのつき

谷川のきよきなかれもれと絶ゑて　島田　好子
みかきて清きふゆのよのつき

訪ふひともまれなるやまの下庵に　大森　純子
つきかけこほるふゆの寒けさ

狠のなくこゑさゆるやまのいはに　大田　久子
ひとり眺むるふゆのよのつき

疎なるこすゑのうつるたにかはに　吉川　國子
さすかけさむき冬のよのつき

氷りてやとるふゆのよのつき

ちりはてし庭の木のはに置く霜の　光りをてらすふゆのよのつき　成田つね子

水鳥のわひてなくなるをとさへて　傾くつきのかけのさむけさ　倉山道子

かれあしのしもは光りてすみた川　浪にうつろふふゆのよのつき　松井佳子

くれたけの葉分の風もふきたえて　をくしも白きふゆのつきかけ　吉川勝子

風をいたみ一葉殘らぬ木かくれの　軒はにさゆるふゆのつきかけ　根岸英子

亂れふすあしのかれ葉に霜さえて　つきかけさむきふゆのよは哉　神田鈴子

池水にうかふ木のはをふき分けて　風こそふゆのつきをみせけれ　春木繁子

をくしもの白きか上に冴えわたる　月のひかりのうつるさやけさ　荒木すま子

みあくれはあきに變らぬ月なれと　かけさすまとは寒けかりけり　近藤秀子

くれ竹のさやきし風はふきたえて　荒川淸子

をく霜さむしふゆのよのつき

つま戸うつ落葉のをとに夢さめて　さえわたるよのつきをみる哉　溝口直子

窓をうつあられのをとに夢さめて　雲間にさゆるふゆのよのつき　溝口寛子

川添のやなきの枝にしもみえて　月かけ寒くなりにけるかな　澤田俊子

さむしとてみる人もなき冬のよの　月はくまなくてりわたりけり　溝口榮子

かけ冴し木のはのこらてのき近く　氷れる月のすさましきかな　秋園喜久子

あらしふくあかやの松にさす月の　かけすさましき冬のよはかな　細井糸子

かれはてゝ木葉のくももなかりき　こずゑにさゆる冬のよのつき　栗田口信子

こと更にこほりはてたる夜半の月　へたつる雲もこゝろありけり　西澤靜春子

片ひさしかたふきかゝる月みれは　袂こほりて身にそしみぬる　長野孝子

久方のつきのかつらもこほるらん　瀨戸榮子

うこくともなくさやけかり鳧

千鳥なく聲もさやかにかけふけて
川瀬にやとるふゆの夜のつき　失名

白ゆきの色もひとつに見ゆるかな
山の端いつるふゆの夜のつき　畠山千代子

柴の戸をすくるしくれの雲間より
さすかけ寒しふゆの夜のつき　畠山百合子

木枯のおとのみのこるおはそらに
影すさましくさゆるつきかな　畠山　淸子

つく〳〵と思へはとくも更けに鳧
さえゆくのみか冬の夜のつき　畠山ゆき子

冬いよはまつふく風もおとさえて
いよゝすみゆく月のかけかな　半谷いく子

山松のこすゑましろにおくしもを
もれ出てさむきふゆのよの月　羽田三緒子

さえわたる月かけ寒きふゆのよは
あしたの霜をおもひこそやれ　河田いし子

置きわたす霜よりほかの色もなく
かけすさましき冬のよの月　河田ふく子

草も木も枯れておく霜しろき夜の
空にさえたるつきのかけかな　横田　秋子

おちはして梢くまなきしもとはら
遠かたみえてさゆるつきかな　横田須磨子

たま霰こほれてはれしあしふきの
のきは寒けきふゆのよのつき　中尾　倉子

夕あらしはらひはてたる木末より
影さえこほるふゆのよのつき　江上加知子

霜むすふ庭のまつかえかけたかく
ひかりもこほる冬のよのつき　筑紫　壯子

木からしもしらぬ常盤の松かえを
もるかけさむきふゆのよの月　長洲餘野子

すむ月のかつらの花はふゆもなは
ひかりおちらす霜かれのには　守山比古子

天の原そらさへしものさゆれはや
うへもこほれる月とみゆらむ　碓井　信子

水鳥のこゑもあはれにしもさえて
てるかげすこし冬の夜のつき　碓井　武子

さえゆけはさえゆく程に冬の夜の
月かけさむく身にそしみぬる　碓井わか子

霜おけるおちはか上をつきかけの

ひかりさやけく照すさむけさ

またちらぬまさきの梢もさひしきに　小町谷園子
あらしにさゆる冬のよのつき

紅葉のちりにしのちはつきかけの　錦織さち子
木の間もれいつる色も寒けし

冬枯のこすゑはあれとさえわたる　櫛田よし子
月のかけにはさはらさりけり

冬の夜は天のかはみつこほるらむ　三谷きみ子
出てくる月のかけもさむけし

木枯の音もふけゆくまつかえに　服部勝美子
のこるも淋しありあけのつき

あつ衣をつけてもひゆる冬の夜は　橋本丹江子
つきの姿はさむけなりける

かむとけもすへき景色の雲間より　牧山清子
しくれて出つる冬の夜のつき

石山のあきよりことにめてたきは　星野暦子
ひらのたかねの冬のよのつき

みる人もなきふゆのよは松か枝に　星野操子
かこちかほにもやとる月かな

やまのはの雲よりいてゝ池みつの　藤林あい子

こほりにやとる冬のよのつき

吹く風にかつらの露やこほるらし　清水あい子
みるさへ寒きやまのはのつき

野も山も木の葉は風にちりはてゝ　伯田たか子
さひしく殘るふゆの夜のつき

一葉たにさそひ殘さぬこからしの　小野田信子
杜にくまなくさゆるつきかな

天の川なかかれてわたるふゆの夜の　吾妻近子
ふけゆくつきの影のさむけさ

冬かれの草葉のうへに照るつきの　柳田里子
かけすさましきむさしのゝ原

かゝるべきくもさへはれて大空に　館脇ます子
照りわたる冬の夜のつき

遠近のやまのもみちもちりはてゝ　田中冬子
みねにさひしき冬のつきかけ

さむけさのいとゝまさるゝ天の川　諸井久良子
こほりて見ゆるふゆの夜の月

冬の夜に空のむらくも打ちはらひ　植木とよ子
出つる月こそさむけかりけれ

草も皆しもかれはてしやまさとに　石川すけ子

氷るばかりにさゆるつきかな

奥山のゆきをふみわけ行くときは　佐藤ゆり子
見るもさむけしふゆの夜の月

ふゆの夜に庭におり立ち見渡せば　高栖とし子
光りさやけき夜半のつきかな

さゆる夜の落葉か上におくしも　萩原章子
光りそへ行くふゆのつきかな

見し秋のいろにかはらぬ月なから　岸　せつ子
ひかりさし添ふ冬かれのそら

文學ふまどにさし入るつきかけに　田代綾子
さむされはゆる冬の夜半かな

枯れはてし芝生の道におきわたす　谷川清子
しもの上寒くてらすつきかけ

冬かれのこすゑくまなく影さえて　山田璋子
おち葉かうへをてらす月かな

露の上にみし影よりもさやけきは　青木森子
ゆきにいろそふ冬のよのつき

嵐吹くにはの木の葉はちりはてゝ　廣田とめ子
霜にさえたるふゆの夜のつき

なか〳〵に寒けかりけり霜よりも　林　久子
あらしにさゆる冬のよのつき

かきくれし時雨の空は打ちはれて　前澤幸子
しもふりかはる冬の夜のつき

木からしの音さへさむし冬の夜の　福原望子
こほりとみゆるにはの月かけ

四つの時變るものにもあらなくに　名取正代子
こほりて見ゆるふゆの月かけ

かれはてし庭のちくさに霜みえて　北川はな子
てる影さむしふゆの夜のつき

住よしの浦ときゝしも名のみにて　青羽逸子
影すさましきふゆの夜のつき

みし秋のおもかけもなく冬枯れし　西原たみ子
のつらを照すつきのさむけさ

白かしの上枝におけるしもの上に　白倉柳子
寒けくやどるふゆの夜のつき

氷りゐしいけのおもてはてる月の　田沼秀世子
かけもさやかに澄わたるなり

芦の葉のそよと音せぬいけみつに　大橋てい子
こほりてやどる冬の夜のつき

峯も尾もうつみはてたるしら雪に　青羽茂枝子

ひかりをみかく月のさむけさ

わか庭のしのゝはくさの霜の上に　中山　富子
やとれる月のかけのさむけさ

かれはてし野邊の草葉の霜の上に　中山嘉壽子
さやけくわたる月のさむけさ

夜もすから吹く木枯のみにしみて　松岡　濱子
霜さえわたるふゆの夜のつき

冴えわたる大うな原のはてまても　小林　美子
くまなくてらせ冬の夜のつき

すはのうみ狐のあとのみえぬまに　久松せい子
こほりをわたるふゆの月かけ

木の葉みな散りし梢にかゝりけり　野中あさ子
あらしにさゆるふゆのよの月

あらそひし人はかへりて月かけの　中川浪江子
ひとり氷をわたるよはかな

みつとりの羽きる浪にうこくなり　平山さを子
池面にすめるゆふつきのかけ

ゆきのみね氷のかはをいくそたひ　櫻井はな子
渡ゝにけらしふゆの夜のつき

嵐吹くよひ〳〵ことに木の葉落ち　櫻井りん子
きのふにまさる庭のつきかけ

ふる雨とまこふはかりそ川の面の　奥　琅子
なみにくたくるふゆの夜の月

川風の身にしむ夜半はひさかたの　武田　玉子
つきのかけさへ氷るなりけり

吹きわたる小さゝの風の音すみて　小池まさ子
しもに冴え行く冬の夜のつき

かれあしをふく風寒く身にしみて　小池みつ子
さえゆく月に千とりなくなり

ふく風に木の葉ちりかふ山のはに　有坂　清子
こほれるはかりさゆるつき影

むらくもは麓に消えてさひしきは　有坂　秀子
まきたつ山のふゆの夜のつき

冬の夜はつき見る人もなかるらん　有坂いそ子
我とかけとのふたりのみにて

をり〳〵に時雨の雲やかゝるらん　一番ヶ瀬繼子
はるれはくもる窓のつきかけ

ふくろふのなく聲すこき山の端の　布施　瑞子
こずゑにやとる冬のよのつき

もみち葉は跡なくちりて木陰れの　鳥居　藤子

やどもさやけきつきをみる哉

夜をふかみいたくも影は傾むきて　西堀　光子
軒はにやとるつきのさむけさ

霜白くおきわたしたるあしの上に　野崎　章子
さえこそわたれ冬のよのつき

船うけてなかむる人もなかりけり　野崎　鐐子
すみたかはらの冬のよのつき

ふゆさむみむすぶ氷のしたにさへ　近森のぶ子
あはれも深くさゆるつきかな

白ゆきのふりつもりたる山のはに　稲田松枝子
かゝれる月のかけのさむけさ

山川のみつのなかるゝれとたえて　森山　英子
月さへわたるふゆの夜半かな

散りしける庭の朽葉の霜のうへに　西堀　房子
ひかりもこほる月のかけかな

人めさへかれたる冬のやまさとに　山本　勝子
さえてさひしき月のかけかな

もみぢばのしからみかくる川よとに　久保田律子
流れもあへぬ冬の夜の月

十二月五日兼題　寒夜讀書

天

横濱相生町四丁目五十七番地　三谷きみ子

降りつゞくみ雪に埋れたるわが宿は、道ふみわけてとふ人もなければ、夕暮より一しははげしきふゞきに、柴の戸かたく鎖して、ひとり窓の下なる文机によりて、古人の書きおかれし文どもひもときぬ。燈火の影小暗ければ、かきたてかきたて讀みゆくに、世の女子のふむべき道のふしぶし、いと細かに、水莖のあとも清らに書き流されたり。かゝかり道といふ事を重んじ給ひし人は、いかに正しき行ありけむ、と思ひめぐらせど、此御敎への、百が一つをも盡しえぬわが身の程の、いとゞあさましう思ひしられて、明日よりはたゆみなくなど思ふも、例のあすを頼む怠りにやあらん、あはれ今宵降り積る白雪のごとく、清き心ならましかど、浮世の濁りにも染まざらんをと、今は寒さも打忘れて、庭に下り立ち左右の手に雪を盛りて、窓の下に積み、古を思ふよすがとなしつるぞ我ながらをかしきや。

地

筑前國嘉穂郡飯塚町　廣田とめ子

ひるのまより、雪のたえまなくて、夜に入りては、さむさいやましぬ。折々は板戸のひまに、雪ふきいる丶音などきこえたり。更け行くまゝに、人のゆきゝもとだえて、いと物さびしけれど、文机によりそひて、烈女傳などとりいでてよみゆきける中に、靜か吉野山の雪にさまよひしひとふしにいたりて、かよわき女の、心ほそくふみわけし事のあとさへ、折にあひて、いとゞあはれにて思ひつゞけられける。されど、賤の小田卷くりかへし見て、ねやのとのまどをひらけど、こほれる月の光りは、いさきよき雪をてらして、身をさすばかりになん。

人

仙臺市名懸町五十一番地　鈴木昌子

野山に紅葉をながめ、菊かりし日も、昨日けふと覺ゆるに、隙ゆく駒の足はやみ、はや四方の山のては雪をかゝぶり、吹く風さむくなりまさり、栗駒岳の麓より流るゝ川も、氷りけむ、瀨の音ひくし。今宵は空のけはひ打ちしくれて、木枯さへ吹きすさべど、まだ深からぬものから、寒さ堪へかたく、いとさうぐゝし、されど、妾等學びの道をたどる身の、いかでかゝることにやたゆむべきと、かたへの文箱より取り出でしは、常に親しみ讀む女鑑なり、燈火かきたて讀み行くまゝに、阿部伊岐女の傳に至り、思はず淚を催しぬ。我が皇國に、孝子節婦と唱へられし女、いと多かるに、阿部伊岐女こそ、また孝節の美德をかねたる人と云ふべけれ。時世のやむことなきに出てしとは云へ、賊の名を蒙りしこそ、げに口惜しき極なれ。世間には、往々孝貞の道を守らず、女德を傷りて、かへり見ざるものあり、なげきても倘は餘りあり、など思ふをりしも霜にさえたる山寺の鐘の音も、物すごく聞ゆるに、埋火の火も消えて、透間もる風身にしみわたるに、あはれ、伊岐女の君には、かゝる寒夜をいかにして過こし給ひけむと、又思ひ出てられて、いとゞ堪へがたくてなん。

（以下原稿到着順）

佐々有隣子

床下になきしきりぎりすも、此ごろは聲まれにかれゆきし夜もすがら、寒燈をきりて、何くれの書どもを、文庫のうちよりひきよせてひらきみるに、靈幸神代の古典は、師のきみのひもときて敎へさとし給ふれど、ばけばけしき妾が心には、何のさとるふし

もなくうちすぎぬ。日清戰史は、此ごろの新しきふしにて、目にも見、耳にもきゝしこと多ければ、くりかへしみるに、身にしむ寒風の學の窓たたきてすさまじきに、雪さへふりて、旅順口威海衞の陣營に、將校等をはじめ、兵卒の守備する夜のありさま、かくもありしかとれもひやられて、當時志のぶけしきをそへつれど、一しは戰史に心ひかれてなん。

畠山千代子

頃しも神無月の末つかた、天地も氷るばかりなるいと寒き夕、獨り文案により、一穗の燈火を友となし、心靜かに文讀めど、節女貞婦の言行より、女子諸般の心得に至るまで、文の上にあらはれて、まのあたり見聞くが如く、いと心地よくうれしかりける折しも、風はすさびて梢に鳴り、み雪はちりて窓を打ち、まづやまづと歎ひし貞女の昔も忍ばれて、更け行く夜半の鐘の音も、何となく哀ねに聞ねてなん。

仁井田　とみ子

夏のころより、何くれといとなきまゝに、さはかりてのむ書をさへ見兼ねしを、やうやう冬の來ぬるまゝに、さむさそひゆくはわひしけれど、夜のながくなりゆくは嬉しくて、夜ふくるまで書を讀みゐしに、木枯の風れそろしきまで、文見る窓に吹きあたりぬ。いましもよむ文は、古き歷史にて、民を思ひやり給ふみこゝろの深かりしみかど、寒夜に御衣をぬかせ給ひしわたりなれは、いとゝいにしへのしのはれてなむ。

山方壽子

四季折々の中、學びの道をたどるに、ふさはしきは秋なれど、人ごとに云ふめれど、冬がれて霜いとしろう置ける夕、やり水よりけぶりたつ頃こそ、いま一きはよき時節なれ、さらぬだに、冬は人の心自ら埋れ居るを、まして木の葉は盡く枯れはてゝ、あとには細やかなる枝を殘し、梢にさへづる鳥の聲は、いとあはれに、山々近きも遠きも皆白たへにて、何となくもの悲し、特に冬の夜は、あたり靜かにして、そとには履の音もなし、かゝる時、一室にこもりて書をひもとけば、精神も淸くして、一きは身にしみ、心の散らぬことといふまでもなし。

當時わがみ國にある文は、大かたそのかみ君に忠をつくしまつり、親に孝を致し、あるは夫によく事へし人々のことを記したるものにして、其みなもとは、

人の人たる道を載せたるものなり。松はみどりに竹は直き、何の故にもあらず、松となりてはときはならざる事能はず、竹となりては直からざる事あたはず、是みな其性に基づけり、さらは萬物の長と稱へらるゝ人はいかなる性なるか、即ち仁義禮智信を具へて、人の道に違はぬが性なり。さるに、時としては、慾といふあさましきもの、加はりて、其よき心を失ふ事あり。古より、この慾をたくましくせる人のために、たふとき帝といへど、あらぬ山のれく、はなれたる島などにより、御心にもあらぬ世を過したまふなど、思ひ出るだにかしこし。いでや、さるいみじうれそろしき世にありへし人々のなかには、又よき行をなしたる人もいと多かめり。かの櫻井のふかき心をくみ、花とのみ散りにし人々の傳、即ち君に忠をつくし、國に力を盡せる事を記したる書、あるは其像などみる時は、感じて己も誠の心をひき起し、求めずして自らの行を顧みるなるべし。其はかよきことをなして、香はしき名を後の世に傳へまはしなど、くさ〴〵浮び出でゝ、しらず〴〵身に行ふやうなりぬべし。かく現に身に行ふは、こよなき利益なり、さて何事も、口に云ふは易くして行ふは難しといへるも空言にあらず、わきて人の行はしか覺ゆ。

それ文の旨とするところは、たゞ其文字を口に唱ふる爲にあらずして、身に行ふにあれど、常に誰も此意にたがはぬやう、行はまほしきことにこそ。かるかゆゑに、唯よみては其効なきのみか、むしろ之をよまざるに同じ。誠に書の上にのみつきてみる時は、深き意もわきまへずして、上邊のよしあしをのみしるされど一たび我身に行へぞ、始めて其効の大なるを知るにいたるべし。

凡そ世の中にありとある業、すべてかくならんが、とりわけて學びの道は、之を實際にせずしては、其効あらはれざるものと覺ゆ。ゆゑに務めて之を實行せん事ひたすら願はしくなん。

高田さと子

つゞれさせてふ虫の音に諫められ、よな〳〵きぬたにふかしゝ頃もありつるが、今や木からしに窓うつ紅葉もなごりなく、折々枕にひゞきし鹿の聲さへきこゑずなり、只朝夕に寒さ斗ぞそひゆく。わきて、こ

の夕べ、雪さへふり出でゝ、見るまにそこら白うなり、となれる家のともしびも、隔てゝ遠き心地ぞする。いで、かゝる時にこそ、古の賢き人のあとをとはめと、ふ箱より書とりいだし、火鉢かたへにひもとくは、静の事を記したるなりけり、讀みもてゆけば吉野山の深雪にふみなやみたりしわたり、いかばかりなりけむ、思へばこよひほどの寒さ、何かあらむとはげまされ、いとゞ心そゝがれて、あたかも其人にあへるやう、あはれの涙にむせびもす、外面に雪やつもりたりけむ、ゆきかふもののおとたえ、あたりますく\しづまりて、仙人の住み家もかくやと、心いよゝさえて、時の逝くも覺えず、埋火の盡きたるも知らでありけるに、母上のめさめ給ひて、はや夜も更けたらむ、風にな犯されそとの給ふ、子を思ひ給ふ深御心に、そむかむはかしこしと、いと惜しき卷を収めたれど、記しありける事柄ども胸にうかび、現に見ゆるやうにて、まどろみかねたり、げに春夏秋といつはあれど、あるは月花のあはれにさそはれ、あるは蚊などいふものに妨げらる、只身にしみて讀まるゝは、この寒くしづけき冬の夜にまさるべき時はあらじな。

わがす　よの子

宵のほどは、うちもとも、何とあらうものさわがしう、こゝかしこにわらひのゝしり、かしこの戸はさしつや、こゝのかうしはいかに、火あやふしなどいとかしかましきに。やゝふくるをまちて、まどれしはなちうき世をよそに、ともしかゝげて文机によりゐたり。人もしづまりて、寺々のかねのねもいつしかをさまり、いよゝふけゆくまゝに、ひまもる風も身にしみて、いとさむきに、いまはたゞ犬の遠ぼえのみかすかにきこえ、かけひのしづく音まさりて、いとさうく\しきに、すびつかきたて、文どもひもとけど、人さわがしかりしをりいぶかしかりしふしく\も、れのづからさとられ、よみもてゆくまゝに、さながら、見ぬ世の人と、かたみに打ちかたらひ、いく千とせののちにありて、いく千とせのまへの世を見、かくかたくなゝる身もて、かけまくもかしこきひじりにまじはり、一間にこもりて、天ざかる遠きくにまでもたどりゆく、げに樂しきはこの道にこそ。今ははや、さむさも打ちわすれ、樂しさに催されて、

心は遠きから國までもあくがれいで、やがて日のもとにかへらんするをりしも、東の空はのあかきに、あなうれし、我み國にかへりしとおもへは、とこよのながなきどりのこゑす、いとをかしと、ふと見いだせど、すびつのはひいとしろう、霜深うおきぬ。

碓井信子

なべて、夜學は、何となう心すみて、晝ときがたき事がらも、おのづから解きえらるゝものぞかし、殊にさえ渡る冬の夜すがら、誰がうつらんきぬたの音、あるは火の用心と呼ぶゝる聲の、あはれかすかにひゞき聞ゆるゆかしさに、おのが肌さむきも、火桶の火のしろくなりゆくもえしらず、ひもとく文は、身にしみてよくおぼえてなん。

錦織幸子

頃しも冬のもなかにて、門田の面に殘り立つかゞしの袖もましろにて、枯れはてし草も時ならぬ花の咲きしと疑はるゝも、學びやより歸りて、くさ〳〵のことなすうちに、はや日も西の山の端にかくろひ、くれぬとつぐる遠寺の鐘の音も、あはれに聞えさむぞ、ねぐら求むる小がらすの聲もいと淋し、池の面に水鳥の羽たゝく音、ふきすさむ風にさそはれて、窓うつ雪の音の外、音づるゝものもなし、燈火のもとに、火桶を傍になしつゝ、つら〳〵におもひめぐらせど、げにいにしへの學者の君は、螢をあつめ或は雪をつみて、書讀む燈火の代となし、學びの道にいそしみ給ひきとや、されど、父母の、たらはぬ事なく學びの道を得せしむる我れ、いかでかくてあらんや、いでや長き夜のつれ〳〵に、今日しも師の君より敎へ給はりし書を調べおかむやと、いと心もいさみて讀みにけり、げにやげに、寒むしとも淋しとも覺えし冬の夜は、好き書よむ時にこそありけれ、岩の上の苔の雫も、つもりては深き淵をもなし、とびかふ塵も、積りては山をなすとや。

橋本丹江子

行くもかへるも、今はおのづからろがいへ路にいたりつきて、こゝちよううねふりけんころ、廿日あまりの月、やう〳〵山のはにさしかゝる、きらめくほしのかげもうすれて、そらは月のみぞひとりすめる。草木はねふりけんとおもはれて、そのおとさへなう、たゞをち方の鐘のおとのみぞ、ひとりさえたる。い

づくにか行くらん人の下駄のおとたかし、まどはよひなから、いまだとさゝてありけるが、ともしびのかげ、あはれに我身をまもるかとぞおもはゆる。まなぶへきふみはまだをへやらで、ひたふるにうちつするほどに、さてはまきもやう／＼をはりちかうなりけるが、そがあひだのめさめしけるかずそしられざりける。夜のふけ行くまゝに、時計のおとも、二つうちぬ、風やう／＼いでゝ、ねぶりし草木をおこすもあはれに、水のながれもとまりけんとおもはるゝほどおとたかく、はては、中そらにたゞよふ月と共に、まどのうちををかすにぞ、今はとてまどとさして、ふすまうちかづくに、となりの家なめりみどり子の風のおとにやおどろきけん、おびえけん、いたうこゑたてゝうちなくに、そが母のしのびねながらに、子もりうたうたふも、手にとるがごといとあはれにて、今は中々にこゝろさむさのあつふすまにもしのぎえず、めはうちふたげども、こゝろはねふらず、こよなうおもひあかしぬ。

内田つる子

折しも冬のならひとて、月いとたかうさえわたりて、あたりも何となうこゑづまりぬるに、雲行く雁の一聲に、いとゞさびしさいやまさりて、おのづからこゝろも清みゆきぬ。あはれかゝる折に書をよみたらむにはと、おぼえしかど、いそぎともしびかゝげて、文机のまへに近づきぬ。ふとみれど、かたへになき友達の殘しゝ書ありけり、手にとりて見れど、寒き夜に書よむは、いとう利ある事よと、いと／＼ねもごろにこゑしありたり。おもへど、古人は雪の光にて書をよみたりしとか、おのれらは、かゝるあきらけき燈の下にてよみ得るは、實によき世にあひたるよ、さるにても、おのが學ぶべき時の來れるならむとおぼゆるまゝに、心をこめてよみもて行くに、時のうつるをも知らでありけるに、讀みにし書のいと多くなり行きしに、心つきて見れど、はやまよなかすきにぞなりける。されどこれより後は、かくなさむと心にちかひて、書ををさめてふしどに入りぬ。そのたのしかりし事、實にたとへんかたもなかりき。

内田すゑ子

ひとりともし火のもとにふみひもとき、いにしへのことどもしらぶるに、一とたび治りひとたび亂れ、ひ

しりの御代のめでたさ、忠臣義士のあと、いとありかたうゆかしうむかししたはれ、夜のふくるにしたがひ、世しづまり事々いたくおぼゆるに、おもしろう限りなくものする折から、戸の隙よりさと吹き入るゝ風に、身もしゝみ、池に集へるをしかものはらふつはさのさびしきに、あないたくも夜ふかしつるかな、月はいかにと窓ひらけは、うたて何時のまにゝりいてけむ、四方は白かねの界と變りぬ。身にしむかぜに、ともし火や消えなむと、跡とざして、またもふみをともにと、ふ机の前に至れど、先のかぜにふきかへけむ、讀みさしたる書のおもてのことなるに如何と見れは、あなたふと醍醐の帝のその昔、寒夜に御衣をとかせさせ給ひしといへる處ありけれど、いといたうかしこくおぼゆるに山寺のかねいとかすかに、雪はます／＼ふりしきりぬ。

山内榮子

寒けき月は、大空に冴え渡り、山風をりをり園の落葉をうち拂ひ、更け行くまゝに、彌しづかに、犬の遠ほえきぬたの音、いとさやかにもの淋しく、夕のほどより、窓の下に燈火かかげ、文机にさし向ひ、くさくさの讀みもの繙くほどに、心もいとゞ清らかに、一層おもしろうおぼえられ曉近うなるをも知らざりきかし。

福原[illegible]子

庭の木がらしいつしか吹きたえて、落葉にさやく霜の聲のみ、ひとり書讀む友とはなりぬ。さらぬだに衣手さぶき冬の夜の、こよひはまた一入にて、すきもる風身にしみわたり、手足氷りて、面の皮さへさけなんばかりに、さむさいはん方なけれど、ふみ繰返す指さへしびれて、思ふにまかせず、面白き草紙も讀みつゞけ得で、火桶抱き寄する事も、たび／＼なるぞうたてき。

林久子

暇なきみも、よるとなれど、をり／＼おのが好める文どもひもときて、こよなきたのしひとするを、今宵は寒のいやましたるに、えたへずや、いつより早う人々のねしづまりけるもうれしう、ともしびかゝげつゝ、ひとり文机にむかひ、昔今の文ども見もて行くに、をかしきふし／＼、あるは身のいましめともなるべきことゞもあれど、我身の上も、かへり見

のみせられて、いと恥かし。されど、常に物學びする人々の、さえかしこく、萬すなはなるは、文の力によるならむと、深く心にしみぬれど、寒さもねふたさも打忘れ、くりかへし見もてゆくに、夜もいたく更けにけむ、あぶらつきて、ともしびの細うなりゆくこそ、あかずくちをしけれ。

名取正代子

長き夜のすさびに、物の書などこれかれ取りいでゝ、打見けるに、そが中に、歷史ばかり人の心を感ぜしむるものはあらざりけり。日の本に生れたらん人のさがとして、殊に史を好むとは、何かし大人のいひけんも、げにさる事になん。此夜風のいたう吹きすびて、身をきるばかりの寒さなりければ、すびつにすみさしそへつゝ、皆人々のいねにたる後の物靜なるを幸に、なほよみもてゆくそが中に、彼延喜の帝の、あられたばしる冬の夜の、ひまもる風さへ肌をつんざくばかりの寒さに、大御心をなやまし給ひ、いかで　朕獨り暖かにやすんじてありなんや、いかにうゑこゞゆる民もやあると、かしこくも大御衣をぬがせたまひて、民をおもはし給ひぬる大御いつくしみの程、あふぎまつるもあやにかしこくたふとくて、身にしむあまり、涙せきあへず、書のぬるゝもおぼえざりき。こをたもへど、我身の、かくすびつによりて、寒さもしらぬほどの、いとゞはづかしやなど、ひとりごつ折しも、母君の夢さめ給ひて、いたく夜もふけぬれど、とくいねよとのたまふに、そむき奉るも本意ならねど、おはせのまゝにふしどに入りぬ。

大久保　みち子

今宵は寒さ一しは身に染みて、たばしる霰に訪ひこん人さへなければ、おのれのへやにこもり、火桶にすみ高う積みて、つれ〲なるまゝ、なにかの文をと文机のあたりかいさぐり、いとよき文をぞ見いでたる、そは先つ日、はる〲東の都よりとりよせたる三輪田女史のものせられし女子の本分てふ書になんありける。こを一とほり讀みさしたるも、かゝる靜けき夜こそ、物の理の明らめられめと、又くりかへしぬ。その中、女德てふくだりに、「宇内の光景一として人道の源を、吾人に示さゝるなし」といふ語ありげにや日々修身科に由り敎への一わたりよりは、うるはしき山、清き水の流れなど、おのづからなる

けしきに臨まんには、心しづまりて、女德の美しさ、凡てのことわりの明らかなるまゝに、ます〳〵、美術のいみしき事をさとり得られて、ことに嬉しうなん。讀むかまに〳〵、一ひらは一ひらより、道の明らかなるに、ぬは玉のくらかりし道も、れのつから明き燈火に導かれぬる心地せられて、嬉しさいといと身に染みぬ。こは、彼の女史か給ものなれは、なにもてむくいんか、さて、ます〳〵風吹きすさみて、寒さ堪へかたさに埋火かきれこす折ふし、霰の、さと、まどを打つ音の烈しさ、いはんかたなし。

岡田春子

ことし秋の末つかた、すきまをもるゝ木枯の、身にしみわたりて冷やかに、庭の木の葉のさら〳〵と、落ちくる音の物さびしく、筧の音もあはれとぞ思はるゝさむき夜、ひとり机によりて、文よみ行くに、人も知る源平のくだりに到れど、世のひめたちの、鑑ともなすべき、かの靜の、みよしのゝみねのしらゆきふみわけて、わが夫のあとをしたひし其事どもは、常盤木のみさをあるに等しく、白妙の雪中に入りにし心地は、如何ばかりならんと思へど、我身ながらも感ぜられ、いとゞ堪へがたく、かのみよしのゝ歌は、念頭をはなれずありけれど、拙き筆もて、茲に一言を綴りて、我行末のをみなの道のあかしともせんとて此くなん。

小澤蓮子

古のひじりのをしへに、三餘の業とて、冬の夜は、文よむにいとよき時節となり、又もろこしの孫康と云へる人は、家貧しく、燈の料なかりけれど、冬の夜には、窓のもとに雪をつみ、其光にて學ひし例もあれど、妾の如きは、幸に燈を欠く事もなき身にて、とくいぬるは、實に心なきことゝればゆ、斯く感ずるものから、それのゆふべより、讀書をはじめぬ、晝のうちは、いとさわがしき賤が家も、あたりに人のこゑとてなく、いと物しづかに、日頃げしがたき文も、あきらかにわかり、古の人を友となし、打かたらふ心地して、實に其たのしき事、言語の外にあるぞかし。されどにや、冬の夜寒も、何のその、夜更の鐘も何あらん、是れぞ學の海に遊ぶものゝ、此上なき樂しみとは、此等を云へるならん。嗚呼冬の夜は、讀書によき時節と、ひじりのたまひし言の葉

も、實に道理にこそ。

鳥居藤子

小夜いたく更けて、つもれる雪に木枯の音も埋れて、心の行くまゝに、すびつ取り寄せ、燈火かきたてゝ、文机に向ひて、ふみ讀みもてゆけは、いみじう心も澄みて、いまゝで解かされし深き心のふしぶしも、おのづからいとやすらかに覺られて、今の世になき人に、現にさし向ひて、敎を受くる心地して、寒けさも打ち忘るるもをかしや、かくて雞の聲に驚かされて、窓の戸押しやりて見渡せは、夜は明け初めて積れる雪に、庭のわたりいと靜なり。

濱口弘子

萩の枯葉の音もうらさびて、更くる秋風のいたう寒きに、遠山寺の鐘のひゞきもさえ渡るいとをかし、みな人のしづまれる比、ともし火かゝげて、文机に打むかへは、いと心すみて、しかすかに古へのことなど思ひやられて、深く心にしむもいとをかし、おのつか難きふしも解き得らるになん、心もすが〳〵しくなりて我知らす見もてゆくに、遠き世の人と向ひかたらふこゝちせらる、かくて鷄の聲するにおどろきて、まどの戸おしあくれは、東の空もはやしらみぬ。

山本勝子

高嶺の雪とは、野中夫人の事を記せる書なり、白雪も降らば降れ、積らば積れ、目さす的貫かでやは、と身の惱みをも打ち忘れて、人めも草もかれはてし、冬の山の頂に、いましませらるゝ夫の、苦しみを分たむや、と思ふ心の一筋には、固く止められける、誡めのつなも、いかでか及ぶべき、かよわき女の身をも、いとはで男だにしりごみする富士の高嶺に、上られし夫人のをゝしさは、その折節の新ぶみの便に聞きけるが、そのつばらなる事こそ聞きたけれ、とつね〳〵思ひたりしに、さいつ頃そを書に編みたるもの出でにき、と聞きしかど、すぐ取り寄せてしが、女の身の悲しさ、冬のいそぎの忙はしさに、何くれと取り紛れ居たりしを、今霄は、餘りに寒けれど、疾く寢なんとて、皆々うち臥したれど、日頃思ひつる書を、この時にこそと喜び勇みて讀みゆくに、いみじきふしぶしのみにて、はや卷の終れるにか、と驚きぬ、繰り返し讀みゆくに、あゝといふ内に又も卷

は終りぬ、三度まで讀みもてゆくにそのふしぶしの、身にたくらべられて、かゝる身となりなまし、かくありてこそ、女の身も映あれ、と思ふにつけ、今朝雪間をわけて、井水汲みける時、つめたしといひけることの、今更恥しく、かたへに置きし炭櫃も、押しやり、つく〴〵と思ふやう今の世の女は、開け行く御代の恵みに逢ひて、女の道は愚か、學びの道も、さま〴〵辿れるに、夫に事ふる輔の正しからで、わき道に奔れるにやあらん、行く處々に、僻事のみ聞くぞかなしき、はては學問なき女を娶るこそなか〳〵善けれといふ人さへぞある、如何なるにかあらん、見せたきは、この書なり、讀ませたきは、この高根の雪なり、いかで恥ぢざらでやは、高根の雪、高根の雪なれは、誠に、け高き威をこそ見すれ、といふ折しも、柴の戸叩くものあるに、怪み見れど、吹きおろす山風の、おとなふなり、隙もる風だに、身を切るばかり、と厭ひし身も、今は嵐の吹くに任せて、佇めど、夜の面の雪にすら、心進みて、踏み出るに、大空に輝ける月影は、うき世の闇に、迷ふ心の内をさへ、照すらん、心地いとすが〳〵しくなりぬ、あはれ、今宵の月、今宵の雪、いとゞ名殘りはつきねども、山寺の時の鐘十あまり二つまで響きぬれなつとめての事も思はれて、ふしどには入りぬ。

十二月廿日兼題
- 歌……都歳暮
- 文……雪だるま

明治三十年一月五日兼題
- 歌……都新年
- 文……盆梅を贈る

（一月五日兼題は十二月廿日〆切）

女鑑第百貳拾壹號目錄

(明治二十四年八月八日內務省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十九年十二月四日印刷
同　年十二月五日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衞
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　(電話番號本局八八)　國光社

(印刷所　東京國光社印刷部)